

沼津市文化財調査報告書 第110集

松長6号墳発掘調査報告書

2015

沼津市教育委員会

例　　言

1. 本書は沼津市大瀬訪字南屋敷 50－2 に所在する、松長 6 号墳の発掘調査報告書である。本古墳の属する松長古墳群では、これまでの調査において 5 号墳までの名称が付されていることから、本古墳を 6 号墳とした。また、本調査を機に行われた松長古墳群の分布調査結果についても併せて報告する。

2. 発掘調査は、沼津市立看護専門学校の駐輪場建設に伴い、沼津市教育委員会文化振興課が平成 24 年度の看護専門学校運営費に発掘調査費用を計上して実施した。

事業実施期間：平成 24 年 11 月 14 日～平成 25 年 3 月 25 日

発掘調査期間：平成 24 年 11 月 19 日～平成 25 年 1 月 30 日

3. 整理作業の実務は池谷と北が担当し、沼津市文化財センターにて行った。報告書本文の執筆および編集は、池谷指導のもと北が行い、遺物図版などの作成において、整理補助員の守屋智子の補助を得た。事務処理は、事務補助員の土屋周子が担当した。

4. 金属製品や石器などの遺物については、株式会社ラングへ業務委託を行い、3 次元レーザースキャナー（PEAKIT）による実測図を作成した。また、金属製品の保存処理作業については、株式会社吉田生物研究所へ業務委託を行った。現地で取得した遺構のデジタルデータについては、株式会社シン技術コンサル（担当：東）が編集を行った。

5. 発掘調査および整理事業の関係者は以下のとおりである。

事業主体者　　沼津市教育委員会　　教　育　長　　工藤達朗

事業担当者　　沼津市教育委員会　　文化振興課

　　課　　長　　井原正利 (H24)　　勝又恵三 (H25・26)

　　課長補佐　　勝又恵三 (H24)

　　主幹兼文化財調査係長　　山本惠一 (H24)　　池谷信之 (H25・26)

調査担当者　　主　幹　　池谷信之　　指　導　主　事　　前嶋秀張

　　主　事　　小崎晋　　主　事　　原田雄紀 (分布調査)

整理担当者　　主幹兼文化財調査係長　　池谷信之　　臨時嘱託　　北佳奈子

6. 本書の作成にあたり、以下の方々にご指導、ご教示をいただいた。記して感謝の意を表す。

鈴木一有　　藤村翔（五十音順、敬称略）

7. 本書に係わる松長 6 号墳の発掘調査資料および出土遺物は、沼津市教育委員会事務局文化振興課文化財調査係（沼津市文化財センター　〒 410-0873 沼津市大瀬訪 46-1　TEL 055-952-0844）で保管している。

凡　例

- 遺構実測図中の水糸高は、標高を示す。
- 土層および土器胎土の色調については、『新版標準土色帳』に基づいて記載している。
- 遺物実測図の挿図縮尺は次のとおりである。
土器：1/3 または 2/5、石器：1/3、大刀・小刀：1/4、馬具・鉄鏃・刀子：1/2、銅錢：原寸

- 本書で用いる古墳の用語については、第8回東海考古学フォーラム三河大会および、静岡県考古学会2007年度シンポジウムにおける定義を参照し、以下のとおりに規定した。また、本古墳の埋葬施設における各部位の名称と計測位置については、下記の図に示した。

【埋葬施設の種類】

竪穴系埋葬施設：上から掘り込んだ竪穴墓坑内に埋葬施設を構築、または直接埋葬を行い、必要以上の空間や出入口を持たない。特に古墳時代前・中期に主流を占めた。

横穴系埋葬施設：埋葬時の出入りに使用される出入口を埋葬施設の一方の壁に付属し、一定の広さの墓室空間を有する。おもに古墳時代後期に普及した。

竪穴系横口式石室：竪穴式石室を母体とし、一方の小口に横口部が取り付けられたもの。

【玄室入口の構造】

無袖：側壁では玄室と羨道の区別が付けがたい（袖が形成されない）状態。

段構造：玄室の床面が、羨道または前庭より低い場合の段差部分。

【埋葬施設の部位名称】

玄室：遺骸の埋葬施設となる部分。

羨道：玄室と石室外をつなぐ部分（原則、天井が架構される）。

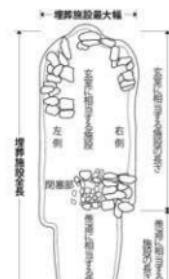
前庭：羨道や玄室に続いて墳丘外に向けて構築された部分。

墓道：石室へ至る通路部分。

墓坑：埋葬施設を構築するために掘削された土坑。掘り方とも呼ばれる。

基底石（根石）：石室を構築するにあたり最下段に据えられた石材。

埋葬施設の左右については、文化庁文化財部記念物課2013『発掘調査のびきー各種遺跡調査編ー』に従い、手前側から奥側を望んだ場合の見方で、右側・左側とする。



部位名称と計測位置

- 本古墳を扱ううえで目安とする時期区分は、本書を執筆する際に参考とした各種文献に示されている年代観を参照し、おおよそ下記のように設定した。ただし副葬品については、各副葬品ごとに作成されている編年を用いたことから、須恵器の型式区分とはずれの生じる場合がある。

おおよその年代	550		600		650		700	
飛鳥編年	MT15	TK10	TK43	TK209	/	TK217	TK46	TK48
奈良編年				飛鳥I		飛鳥II	飛鳥III	飛鳥IV
後期編年				Ⅲ期中葉	Ⅳ期後葉 / Ⅴ期末葉	Ⅳ期前半	Ⅳ期後半	Ⅳ期末葉
後期前半						終末期前半	終末期後半	
後期後半								
後期								
後期1		後期2	後期3	後期4		終末期1	終末期2	

田辺色編年と飛鳥編年を基準とし、静岡県において用いられる後江田色編年を対応させてている。また、本古墳の年代を推考するうえで重要な、鉄鏡および高麗編年とのおおよその対応関係も示した。参考は大谷宏治の編年（2003『静岡県歴史文化財調査研究会研究紀要』第10号）、馬具は内山敏行および鈴木一の編年（2006『東海の馬具と鉄刀』）を参考としている。

目 次

例 言 凡 例

第Ⅰ章 調査経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査事業の経過	1
第3節 整理事業の経過	3
第Ⅱ章 古墳の位置と環境	4
第1節 古墳の位置と地理的環境	4
第2節 周辺遺跡と歴史的環境	8
第Ⅲ章 松長6号墳の調査	11
第1節 墳丘と外部施設	11
第2節 埋葬施設	13
第3節 遺物	28
第Ⅳ章 松長古墳群の分布調査	43
第1節 千本砂礫州上の古墳	43
第2節 分布調査	43
第Ⅴ章 調査成果	46
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 松長6号墳位置図	5	第17図 埋葬施設外出土土器実測図	29
第2図 周辺地形図	6	第18図 馬具の名称と構造	30
第3図 周辺地質図	7	第19図 韶の名称と構造	30
第4図 周辺遺跡分布図	9	第20図 松長6号墳出土韶模式図	31
第5図 調査区位置図およびトレンチ・ テストピット設定図	12	第21図 馬具実測図(1)	32
第6図 古墳全体図	13	第22図 馬具実測図(2)	33
第7図 テストピット実測図	14	第23図 馬具実測図(3)	36
第8図 土層セクション図	15	第24図 大刀・小刀実測図	37
第9図 石室実測図	17・18	第25図 鉄鏃実測図	38
第10図 床面1-A実測図	19	第26図 刀子実測図	40
第11図 床面1-B実測図	20	第27図 弥生時代石器実測図	42
第12図 床面2実測図	21	第28図 銅錢実測図(PEAKIT)	42
第13図 遺物検出状況図(全体図)	23・24	第29図 松長古墳群分布調査結果	44
第14図 遺物検出状況図(馬具)	26	第30図 金銅製内湾椭円形鏡板付轡出土例	49
第15図 遺物検出状況図(武器・工具・土器)	27	第31図 イモガイ装込金具出土例	51
第16図 埋葬施設内出土土器実測図	29	第32図 松長6号墳出土韶修理部位	51

挿表目次

第1表 周辺遺跡一覧表	10	第5表 刀子観察表	41
第2表 土器観察表	30	第6表 弥生時代石器観察表	42
第3表 大刀・小刀観察表	41	第7表 銅錢観察表	42
第4表 鉄鏃観察表	41	第8表 松長古墳群分布調査結果一覧表	45

第1章 調査経過

第1節 調査に至る経緯

今回調査が行われた場所は、沼津市立看護専門学校（以下、看護学校とする）の北側に隣接する180m²ほどの狭い範囲である。草木が生い茂ってわかりにくいものの、径十数mほどのマウンド状の盛り上がりが確認できることから、以前より、松長古墳群を構成する円墳ではないかと考えられてきた。この上には小さな祠が祀られていたが、祠を管理していた講中が解散し祠も撤去されたため、看護学校が駐輪場用地として購入した。駐輪場として利用するためには、墳丘と思われる場所を削土する必要があることから、沼津市教育委員会では平成24年度の看護学校運営費に発掘調査のための費用を計上し、本調査を行うこととした。

第2節 発掘調査事業の経過

現地調査は平成24年11月19日～平成25年1月30日にかけて行われ、調査面積は延べ180m²にのぼる。付近には住宅が建ち並ぶことから、北側には防砂ネットを設置し、看護学校的敷地内であることから生徒が立ち入らないように木製のバリケードを設置した。現地の作業は、重機による抜根作業から開始した。かつて祠を取り壇んでいた社叢はすでに伐採されていたが、多数の木根が残っていたことから重機で引き抜き、ダンプで隣接する文化財センター敷地内へ回送して仮置きし乾燥させた。

11月19日からは作業員を投入しての、本格的な調査を開始した。まず主体部の位置を確認するため、墳丘部中央付近に、東西方向へ幅1mのトレンチ（以下TRE1とする）を設定し、手作業で掘り下げを行った。東端部分を中心に、攪乱が地山近くまで達している部分が多く、除去しきれなかった木根も残っていたことから、作業は思うようにはかどらなかった。20日はTRE1の掘り下げと並行して、墳丘の測量作業に着手した。21日にはTRE1の掘り下げが古墳構築面まで達し、径50cm前後を中心とする亜角礫を検出したことから、この面で掘り下げを中止した。そこで、TRE1と直交する南北方向のトレンチ（以下、TRE2とする）を新たに設定することにしたが、TRE1より北側は木根が多く残り、道路までの距離も近いため設定を断念し、南側のみ掘り下げを開始した。TRE2の上層では亜角礫や海浜礫が多数出土し、TRE1の西側では近世・近代の陶器が出土している。22日にはTRE1の掘り下げが終了し、埋葬施設を構成する亜角礫の一部を検出した。TRE2は清掃して土層断面の実測を行ったが、TRE1と同様に複数の攪乱が礫床近くまで及んでいることから、墳丘全体の形状はかなり改変されているものと想定された。

また、22日以降はトレンチ以外の部分の調査にも取り掛かった。本調査区は北西～南東方向を軸とする長方形に近い形状を成すことから、T字状に直交する2本のトレンチ（TRE1と2）を境界として、便宜的に南西側調査区・南東側調査区・北側調査区と調査区域を分け、掘削を進めることとした。22日には南西側調査区、27日には南東側調査区の掘削に着手している。28日はトレンチの設定状況と墳丘の現状を記録するために、RCヘリコプターによる空中写真撮影を行った。29日には南東側調査区の掘削が終了し、新たに北側調査区の東側で掘削を開始した。また、南西側調査区では主体部に向けた盗掘坑が検出された。

12月3日には、南西側調査区の盗掘坑肩部付近から長さ76.8cmの鉄製大刀が発見され、4日には南西側調査区南西隅の攪乱層から弥生時代の大型船刃石斧が出土した。かつて松長古墳群を構成する古墳の一つが調査された際に、弥生時代中期の土器が出土していることから、同時期の集落が付近に広がっていた可能性が高いと思われるが、今回の調査ではこの石斧以外に弥生時代の痕跡を確認することはできなかった。

7日には南西側調査区の埋葬施設閉塞部付近と考えられる辺りから、土師器の模倣品が割れた状態で出土し、10日には盗掘坑との境界付近で刀子が出土した。南西側調査区では、掘り下げが進んで古墳構築面に達し始めたところから礫床の検出が続いた。12日には、南東側調査区が古墳構築面に近づき、埋葬施設最奥と思われる部分でやや大きな亜角礫を検出した。14日に南西側調査区で、古墳構築面までの掘り下げが完了したため、土層観察用に残していたセクションベルトを外し始めたところ、2本のベルトの接点付近で馬具・鉄鎌・刀子が出土した。これ以降は北側調査区と南東側調査区の掘り下げに重点を置いて作業を進めたが、北側調査区には電柱の支持鉄線やかつてのガス管が埋設されていたほか、道路が近いために抜ききれていなかった木根も残されていたため、掘り下げには時間を要した。19日には南北方向のセクションベルトを外し終わり、東西方向のセクションベルトを残して、墳丘全体の掘り下げも終了したため、馬具・鉄鎌・刀子の実測を行った。埋葬施設の主軸方向となる東西方向のセクションラインでは、土層断面を記録するとともに、奥側に設置された石材と礫床の断面も実測した。20日には東西方向のセクションベルトも取り外し、25日に看護学校の3階から全体写真を撮影した。

26日以降は埋葬施設の実測に重点を置き、埋葬施設を構成する石材と礫床の実測を行った。翌年は1月10日より作業を開始し、径15～25cmの大いな海浜礫を用いた礫床（床面2）の実測や、埋葬施設全体の写真撮影を行った。床面2の下にはもう1枚、拳大以下の海浜礫を用いた礫床（床面1-A・1-B）が確認されていたことから、記録の済んだ床面2の礫を外しながら床面1を露出させていき、21日に全体の写真撮影を行った。24日には礫床を半裁して、埋葬施設主軸方向のセクションで土層断面の測量を行い、25日には残っていた礫を取り除いてその下を掘削し、掘り方を検出した。28・29日は、掘り下げを行ったことで新たに形状の明確になった石材を追加実測して修正を加え、掘り方を実測するとともに、墳丘の土層確認用に設定したトレーナーやテストピット（TP1）の掘削と実測、写真撮影を行った。その後、文化財センター内に仮置きしていた土を調査区内に埋め戻し、30日にはすべての作業を終了した。

遺構・遺物・土層断面などの実測は光波測距儀によって行い、電子野帳に記録した後、沼津市が導入している遺跡管理システム（株式会社シン技術コンサル製）に取り込んでデータベース化した。埋葬施設を構成する石材については遺構線を用いて光波測量し、礫床の礫は基準となる礫の単点を測量してトータルステーションに取り込み、写真測量結果と手作業による実測結果を一致させるための基準とした。土層断面の注記は、第一合成株式会社製の土色計（SCR-1）を用いて色調を測定し、新版標準土色帳に準じて記載を行っている。現地の作業状況、遺構・遺物の出土状況などについては適宜、写真撮影を行い記録した。また、墳丘全体の状況などについては、業務委託としてRCヘリコプターによる空中写真撮影を行った。



TRE 1 の掘削作業



南西側調査区の掘り下げとセクションベルト

第3節 整理事業の経過

整理事業については、本格的な作業および報告書の作成を平成26年度に行った。整理作業は沼津市教育委員会文化振興課文化財調査係が担当し、市内大諏訪46-1に所在する沼津市文化財センターにおいて実務を行った。

整理作業に先立ち、埋葬施設から出土した金属製品の保存処理を平成24・25年度に行った。平成24年度は、特に錆と腐食が進んでいるものについて、その進行を止める応急処置を行うため、株式会社吉田生物研究所との間で、「平成24年度 沼津市立看護学校内松長古墳群発掘調査出土鉄器仮保存処理業務委託契約書」を締結し、馬具一式と鉄鏃12点の保存処理を実施した。さらに、平成25年度にも同社と「平成25年度 沼津市立看護学校内松長古墳群発掘調査出土鉄器保存処理業務委託契約書」を締結し、平成24年度に応急処置を行った馬具と鉄鏃に加え、大刀・小刀と古銭についても錆の進行と腐食を防ぐ恒久的な保存処理を実施した。これらの金属製品は、海岸近くの塩分を多く含む土に覆われていたことから錆の付着が激しく、また多くの小礫が融着しており、元の形状が確認しづらい状態であった。そのため、X線透過撮影によって遺物の構造や劣化状態を確認し、それに基づいて錆や小礫を除去するとともに、細かく破碎しているものについては文化財専用樹脂を用いて接合し、遺物が製作された時点の形状に近づけるよう努めた。

平成26年度は、現場資料や写真、日誌の整理から作業を開始した。金属製品の実測図については、株式会社ラングに業務委託をして作成した3次元レーザースキャナー(PEAKIT)による図と、保存処理時に撮影したX線写真、手実測による実測図を併用し、整理作業補助員がAdobe Illustrator®上でペントラベットによるトレースを行って作成した。また土器については、接合作業後に手実測による素図を作成してトレースを行い、必要に応じて採拓を行っている。

これらの作業と並行して、報告書図版の作成と原稿の執筆を行った。遺構図版は、現地作業時にデジタルデータとして取り込んだものに必要最低限の編集を加えて整合性を確認し、Illustrator®上で再編集した。これらの編集作業は、「整理事業支援業務委託」として、沼津市において遺跡管理システムを運用・管理している株式会社シン技術コンサルの社員が、担当職員の指示に従って実施した。

写真図版については、現地調査時に撮影した記録写真および、整理作業時に撮影した遺物の記録写真を合わせて整理し、原稿については調査日誌などの記録を基本資料としながら執筆を進めた。以上の作業を行った後、原稿、遺構・遺物図版、写真図版などすべてをAdobe InDesign®上に割り付け編集した。



埋葬施設の実測



測量用の写真撮影

第Ⅱ章 古墳の位置と環境

第1節 古墳の位置と地理的環境

(1) 古墳の位置

松長6号墳の所在する沼津市は、駿河湾に面した伊豆半島の付け根に位置し、旧国名でいう駿河と伊豆の境界に市域が及ぶ。市街地は市域南部を中心に広がり、浮島ヶ原と呼ばれる低湿地帯や黄瀬川扇状地を土台としている。北部には富士山を背に愛鷹山がその裾野を広げており、近年の市内における開発は、この丘陵地で盛んに行われている。新幹線や東名高速道路の開通、工業団地の進出に加え、平成24年4月には新東名高速道路が開通したことから、人・物・情報などの交流がより活発化することが期待される。

今回調査が行われた松長6号墳は松長古墳群を構成する古墳のひとつで、海岸線からほど近い沼津市大諏訪に所在する。JR 東海道線片浜駅から南東へ約1km、海岸線から北へ約350mの地点に立地し、海岸線に沿って走る県道富士・清水線（旧国道1号線）と住宅街のなかを走る県道東柏原・沼津線（旧東海道）に挟まれている（第2図）。調査区は、沼津市立看護専門学校敷地内の北西端（裏門横）に位置しており、その周囲は北側から西側に住宅地、南東側に沼津市文化財センターや片浜地区センター、片浜小学校が建ち並ぶ。また南側の海沿いには、千本松原と呼ばれる青々と茂った松林が続き、世界遺産にも登録された三保の松原と並ぶ東海道の名勝として知られている。このように松長6号墳は、北には遠く愛鷹山と富士山がそびえ、南には千本松原と駿河湾が広がる、美しい景観のなかに構築されている。

(2) 古墳の立地環境

松長6号墳（松長古墳群）は、駿河湾沿いに続く砂礫州上に立地している。この砂礫州は、富士市の富士川河口から沼津市の狩野川河口および牛臥山にかけて続き、総延長は約22kmに及ぶ。砂礫州の大部分は海成砂礫で構成されており、そのおもな供給源は富士川と狩野川である。これらの砂礫は、駿河湾奥を東へ向かう沿岸流により移動運搬され浅海底に堆積したものが、海退により海面上に姿を現したもので、現在はその上を風波による飛砂が覆つて大部分が砂丘を形成する。古墳から直線距離にして350mほど南へ歩くと海岸に到着するが、浜には海浜礫の堆積が目立ち、現在では砂浜というより礫浜と表現すべき景色が広がっている。

この砂丘（砂礫州）は、田子の浦砂丘、千本砂礫州などと呼ばれ（以後、千本砂礫州で統一する）、南北の幅は約200～900m、平均高度は5～10mで、全体は海岸付近から北へ向かって緩やかに標高が低くなっていく。千本砂礫州は構成する砂礫の岩質や起源によりさらに細分され、富士川河口から沼津市新中川までを鈴川砂丘、千本公園から狩野川河口付近を千本砂丘、狩野川河口から牛臥山までを牛臥砂丘と呼

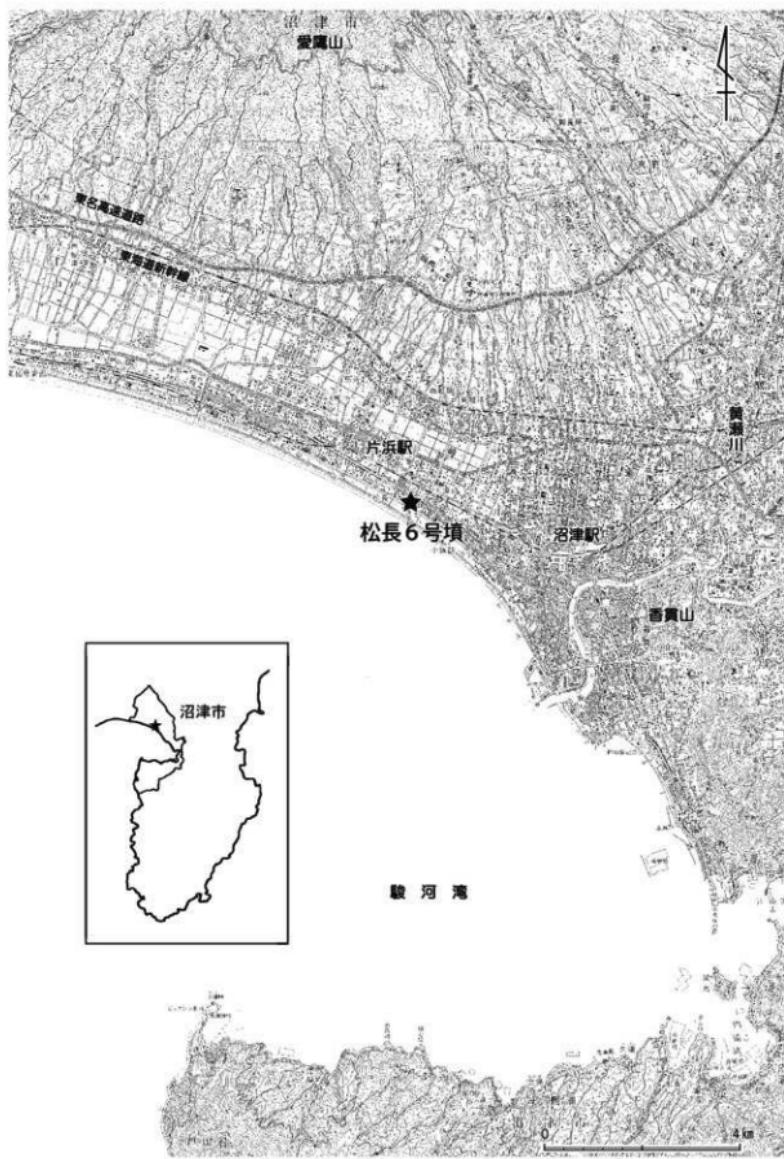


古墳近くの海岸堤防から望む富士山

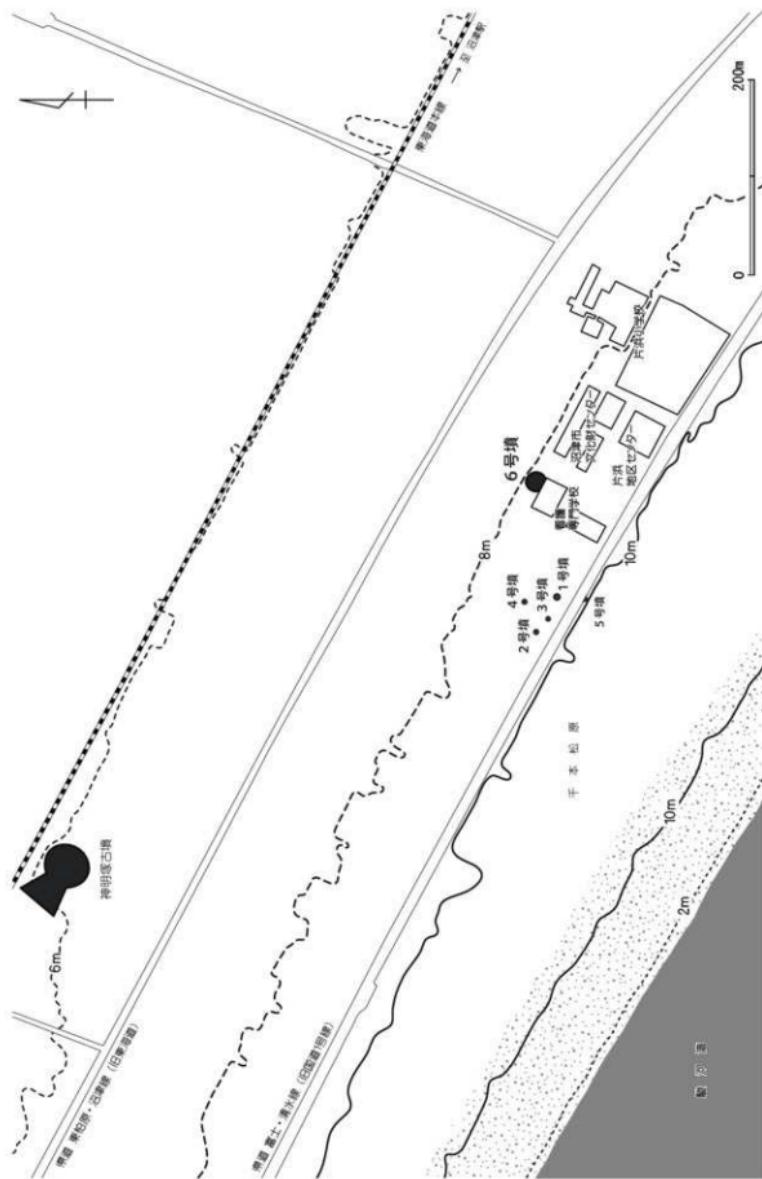


古墳近くの海岸線と浜に広がる礫

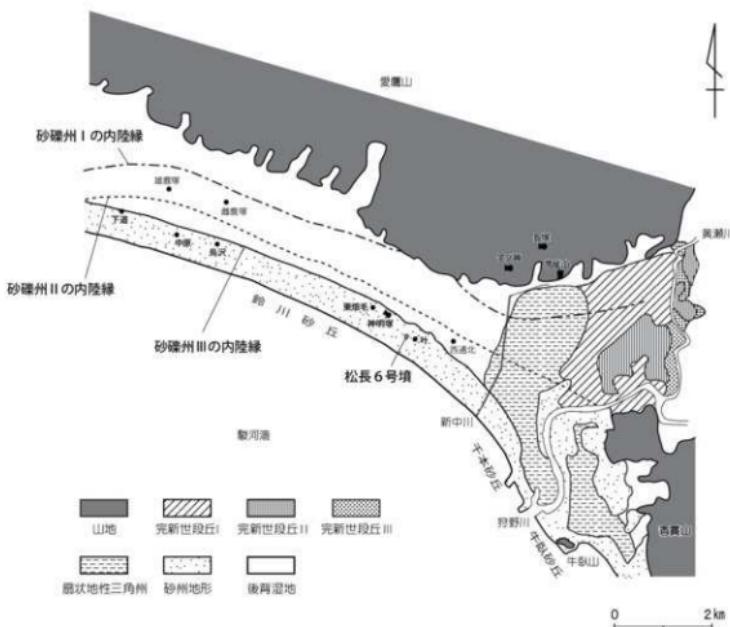




第1図 松長6号墳位置図



第2図 周辺地形図



第3図 周辺地質図 (昭和1995を基に収集)

んでいる。松長6号墳が立地する鈴川砂丘は総延長約18kmに及び、砂礫州全体の8割に達する。前述の通り、砂礫州を構成する砂礫の起源はおもに富士川と狩野川であるが、鈴川砂丘を含む砂礫州の大部分は富士川起源の砂礫で占められており、千本砂丘と牛臥砂丘では、これに狩野川起源の砂礫が含まれる。

さらに古墳の周辺に目を向けると、千本砂礫州の北側には浮島ヶ原と呼ばれる低湿地帯、東側には黄瀬川扇状地といった、様々な地質が見られる(第3図)。古墳付近の表出する砂礫州の範囲は、北限がおよそ東海道本線の北側と推定され、頂面標高は砂浜付近および海沿いの県道南側で10m前後を測り、そこから北へ向かって緩やかに傾斜して、古墳付近では8m前後を測る。

(3) 砂礫州と浮島ヶ原

千本砂礫州は、現在の砂礫州を含めた3列の砂礫州によって成り立っている(第3図)。これらは内陸側から古い順に砂礫州I・砂礫州II・砂礫州IIIと命名されており、砂礫州IとIIは一部を除いて北方の浮島ヶ原の下へ埋没している。現在の砂礫州は砂礫州IIIにあたり、松長6号墳はこの上に形成されている。砂礫州および周辺の地形は、おおよそ次のような変遷をたどって形成されたものと考えられる。

10,000～6,000年前頃、駿河湾の奥部は愛鷹山の山裾にまで達し、現在の浮島ヶ原は海域であったが、富士川起源の礫が運搬され砂礫州Iの形成が始まったことで、砂礫州より内側の海域は潟湖となった。6,000～4,000年前頃には砂礫州Iが離水したこと、背後の潟湖は沼沢地や湿地へと変化し、さら

に砂礫州Ⅰの海側に砂礫州Ⅱが形成され始めたことで砂礫州Ⅰが閉塞された。2,000年前頃には、砂礫州Ⅱの海側に形成された砂礫州Ⅲが離水した。周辺環境はこのような変遷をたどって整ったと考えられ、松長6号墳が築造された古墳時代後期には、砂礫州ⅠとⅡは現在と同様に浮島ヶ原の下へほとんど埋没しており、砂礫州Ⅲを土台として集落や古墳が発展した。また、その背後の浮島ヶ原は沼沢地・湿地の環境が長く続き、戦国時代頃にかけて陸地化していったものと考えられるが、その中央部は近年まで湿原が残り、胸まで浸かりながら田植えを行っていたという。現在は放水路の設置や埋め立てにより、ほとんど旧状を留めていない。

第2節 周辺遺跡と歴史的環境

松長6号墳の所在する千本砂礫州上を中心に、周辺の遺跡や歴史的な環境の変化を概観する。

【旧石器時代・縄文時代】

遺跡のほとんどが愛鷹山麓の斜面上に集中している。前節で述べたように、千本砂礫州は最も古く形成された砂礫州Ⅰでも、陸地化して環境が整ったのは4,000年以上前であることから、砂礫州上に縄文時代中期より古い遺跡は確認されていない。ただし、千本砂礫州背後の山裾には縄文時代の遺跡が多数分布しており、西から順に吹上遺跡、葱川遺跡、大芝原遺跡、鳥谷アラク遺跡などが確認されている。縄文時代中期から晩期になると、浮島ヶ原のほぼ中央付近に位置する雄鹿塚遺跡と雌鹿塚遺跡で遺物が確認されるが、これらの遺跡は浮島ヶ原（沼沢地・湿地）の下に埋没した砂礫州Ⅰに起因する微高地上に立地する。

【弥生時代】

弥生時代前期から中期にかけては、市域全体を通して確認できる遺跡が非常に少なく、後期から急激に増加する傾向が認められる。縄文時代までおもな生活圏となっていた愛鷹山麓では、後期になると標高100～170mにかけての丘陵中腹に大規模な集落が営まれるようになる。また中期には、低地の台地部や浮島ヶ原、狩野川河口でも居住が始まつたようで、浮島ヶ原に形成された雌鹿塚遺跡では後期を主体とする多数の住居址や、農具・祭祀具などの木製品が出土している。このような集落の盛んな形成は、砂礫州Ⅲの離水に伴い背後に安定した環境が整つたことをうかがわせる。千本砂礫州でも鈴川砂丘上に、三本松遺跡や六軒町遺跡、軒通遺跡など中・後期の遺跡がわずかに分布しているが、発掘調査が行われていないため遺跡の詳細は明らかになっていない。松長6号墳の調査では、弥生時代の大型蛤刃石斧が1点出土し、松長古墳群に属する他の古墳でも弥生土器が出土していることから、古墳群の辺りにも弥生時代の集落が存在していた可能性が高い。

【古墳時代】

愛鷹山麓から平地部へと生活圏が移行し、千本砂礫州上や黄瀬川扇状地上に多くの集落が営まれるようになる。また初頭から後期にかけて、高尾山古墳・神明塚古墳・長塚古墳・子ノ神古墳といった大型の前方後方墳や前方後円墳が築造され、群集墳や横穴群も形成された。集落が希薄となつていった愛鷹山麓では、後期になると群集墳が形成される。古墳群を構成する古墳は開析谷に挟まれた尾根ごとに一群を成し、標高200m付近まで分布する。千本砂礫州では鈴川砂丘上で後期に属する集落が多数確認され、松長6号墳の南東側には叶遺跡、現在の片浜駅南側には東畠毛遺跡などが分布している。また、古墳から600mほど北西には前期に築造された神明塚古墳が位置し、千本砂礫州上に築造された古墳としては最大・最古を誇る。さらに、松長6号墳を含めた30基以上の円墳から成る松長古墳群が砂礫州に沿つて形成されていたが、現在ではそのほとんどが消滅してしまった。市内南部の海岸沿いと香貫地区には横穴群が形成されており、凝灰岩や安山岩の露頭を掘削して造られている。



第4図 周辺遺跡分布図

第1表 周辺遺跡一覧表

図 No.	沼津市 遺跡 No.	遺跡名	時 代	検出遺構・遺物等	沼津市 報告書
1	204	雄鹿塚遺跡	繩文後期～晩期 弥生中期～古墳後期	縄文土器・石器・弥生土器・石器・青銅器・土師器（西・高环・坦・壺）	39・46集
2	203	雄鹿塚遺跡	繩文中期～晩期 弥生中期～古墳中期	縄文土器・石器・弥生時代後期住居址 41 基・掘立柱建物址 3 棟・溝状道構 3 基・溝状道構 11 基・杭列 11 基・土坑・柱穴・ピット・弥生土器・木製品・石器・金属器・土製品・石製品・土坑 2 基・土師器（壺・鉢・高环・坦・壺・手程土器）・石製品	51 集
3	24	神田遺跡	縄文	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器	
4	34	古城遺跡	縄文中期～弥生中期～後期・古墳初頭・後期	石製品・弥生土器・土師器（壺・环・高环・壺）・須恵器（壺・环・高环）	32 集
5	66	自黒身遺跡	弥生中期・後期 古墳・平安	弥生時代後期～古墳時代前期の住居址 30 基以上・井戸址 1 基・溝状道構 2 基・轟址・弥生土器・石器・鉄片・掘立柱建物址・周溝墓・土師器・土製品・石製品・平安時代住居址・土師器	2 集
6	80	尾崎遺跡	弥生後期～古墳中期 古代	弥生時代住居址 21 基・溝状道構 1 本・弥生土器・石器・古墳時代住居址 7 基・土師器（壺・小型壺・鉢・碗・高环・壺・小型壺）・須恵器・木製品	73 集
7	82	子ノ神古墳	古墳（時期不明）	前方後円墳（墳丘長約 64 m・石室不明）・土師器	県埋文 55 集
8	186	丸子町遺跡	弥生・古墳後期	弥生土器・石器・古墳時代の祭祀遺跡（配石・小碑群・土坑・柱穴）・土師器・須恵器・瑪瑙勾玉・ガラス製丸玉・小玉・土製丸玉・石製模造品（子持勾玉・勾玉形・剣形・有孔環・臼玉）・鉄製品	
9	192	中通遺跡	弥生後期・古墳中期	弥生土器・土師器	
10	193	西通遺跡	古墳	土師器	
11	397	西通北遺跡	弥生中期・古墳・古代 中世・近世	弥生時代中期住居址 2 基・溝状道構（環濠）・柵列・土坑・弥生土器・石器・木製品・鉄鋌・土師器・古代溝状道構・土坑・土師器・須恵器・灰釉陶器・綠釉陶器・石器・木製品・中近世陶磁器	107 集 県埋文 239 集
12	194	軒通遺跡	弥生中期 古墳中期・後期	弥生土器・土師器	
13	359	叶遺跡	古墳～平安	住居址 7 基・土師器（环・壺・壺）・須恵器（环蓋・环・壺・壺）	
14	198	伴名田遺跡	弥生後期・古墳前期	掘立柱建物址 2 棟・溝状道構 1 本・杭列・井戸址・土器・ガラス小玉・石器	
15	197	神明塚古墳	古墳（4世紀）	前方後円墳（墳丘長約 53 m・粘土層・箱形木棺 ?）・土師器（底部穿孔壺・环・高环・S 字彫・台付壺）	29 集 市史編さん調査報告書 15 集
16	358	東綿毛遺跡	古墳後期～平安	古墳時代住居址 6 基・土師器（环・器台・壺・瓶）・須恵器（环蓋・壺・大甕）・磁石・石拂・古代住居址 34 基・土師器・須恵器・墨書き土器・灰釉陶器・綠釉陶器	70・72 集
17	425	大塚古墳群	古墳	円墳数基（大塚古墳含む）・土師器・須恵器	『駿東郡原町誌』
18	200	御殿場遺跡	古墳	土師器	
19	367	鳥沢遺跡	縄文後期 古墳後期～奈良	古墳時代住居址 9 基・土師器（环・壺・瓶）・須恵器・滑石製模造品・奈良時代住居址 8 基・土師器（甲斐型环・長頸壺・楕円土器）・須恵器（蓋付壺）	66・103 集
20	202	古田遺跡	古墳	土師器・須恵器	
21	201	中原遺跡	古代～近世	住居址 131 基・溝状道構・土坑・柱穴・土師器・須恵器・土製品・石器・鉄製品・中近世陶磁器（調査現在までの出土遺物）	調査中
22	205	下道遺跡	縄文中期 古墳後期～古代	古墳時代住居址 4 基・掘立柱建物址 2 棟・溝状道構 15 本・堅穴状道構 2 基・欽状道構・土師器（环・高环・壺・壺・瓶）・須恵器（壺・环蓋・环身）・土製品・石器	57 集

【奈良時代・平安時代】

沼津市域は駿河国東部の中心地であり、いまだに駿河郡衙の位置は特定できていないものの、関連すると思われる集落や寺院跡が発見されている。千本砂礫州では、郡衙と関わりが深い遺跡として千本砂丘上の千本遺跡が挙げられる。その他には、鈴川砂丘上に鳥沢遺跡、東畠毛遺跡、叶遺跡といった集落が分布しており、古墳時代から継続して集落が営まれていたようである。

【引用・参考文献】 沼津市史編さん委員会・沼津市教育委員会 2005 「沼津市史 資料編・自然環境」

鶴山開拓 1995 「下道遺跡発掘調査報告書」沼津市文化財調査報告書 第 57 集

鶴山開拓・久田晃代 2013 「西通北遺跡発掘調査報告書」沼津市文化財調査報告書 第 107 集

第Ⅲ章 松長6号墳の調査

第1節 墳丘と外部施設

今回の調査が行われた地点では、径十数mほどのマウンド状の盛り上がりの上に祠が祀られていたことから、以前より、松長古墳群を構成する古墳の1つが存在するものと想定されていた。今回の調査により松長6号墳は、現状で判明している松長古墳群内の古墳において最大級の規模を誇り、円墳としては最も古い時期に築造されたものであることが明らかとなった。しかし今回の限られた調査範囲では、埋葬施設を含む墳丘の中心部を検出することはできたものの、墳丘全体の構造や正確な規模、外部施設の情報を得ることはできなかった。

(1) 墳丘

①規模と形状

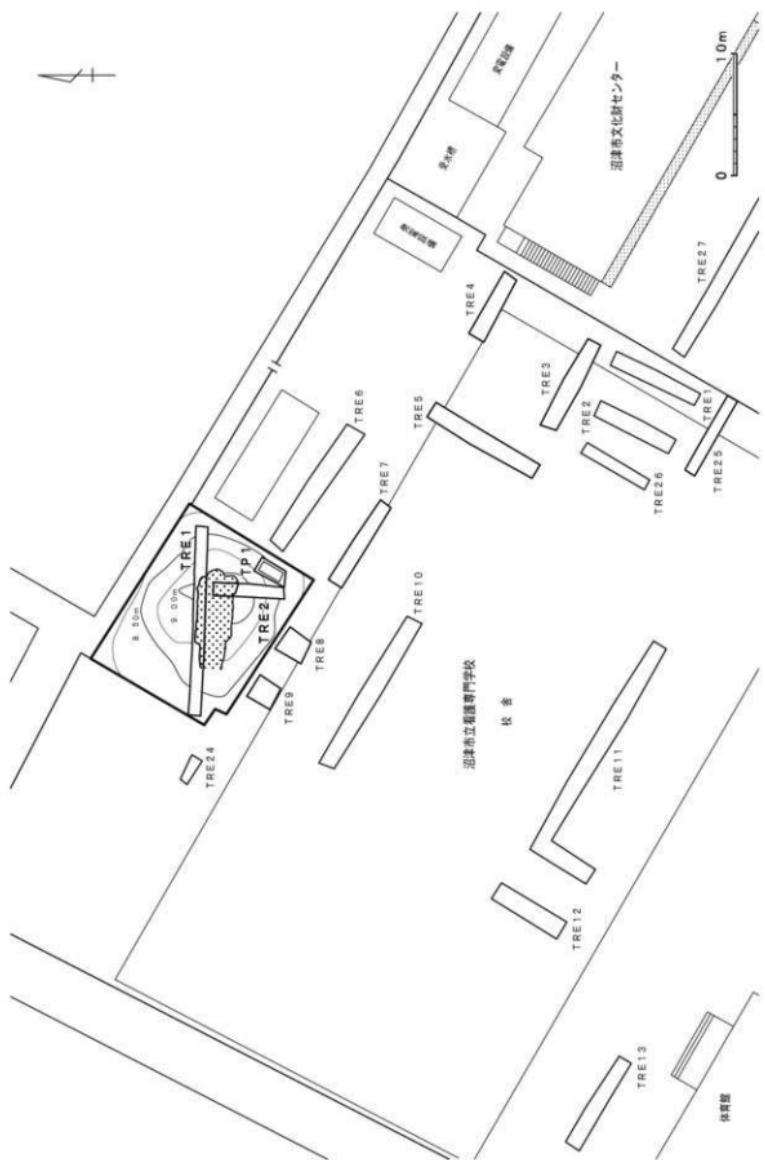
今回の調査範囲では、墳丘端や外部施設が確認されておらず、墳丘長は推測の域を出ない。調査区の北西端から南東端までは15mを測るが、その外側へさらに墳丘の傾斜が続いていることから、15mを超えることは間違いないといえる。墳丘は、祠を祀る社域の造成などにより盛土の大半が削平されてしまったと考えられ、残存高（古墳構築面から現在の墳丘頂部まで）は約1mを測る。この表土は、埋葬施設内へ大量に流入して床面を広く覆っており、墳丘を構築していた本来の盛土は埋葬施設奥側から南東側にかけてわずかに残されていた。さらに、祠を取り囲んでいた社叢の木根や盗掘の影響で複数の攪乱が床面近くまで及んでおり、墳丘の形状はかなり改変されているものと思われる。従って、本来の墳丘形状や規模、構造を完全に復元することは困難である。

②土層

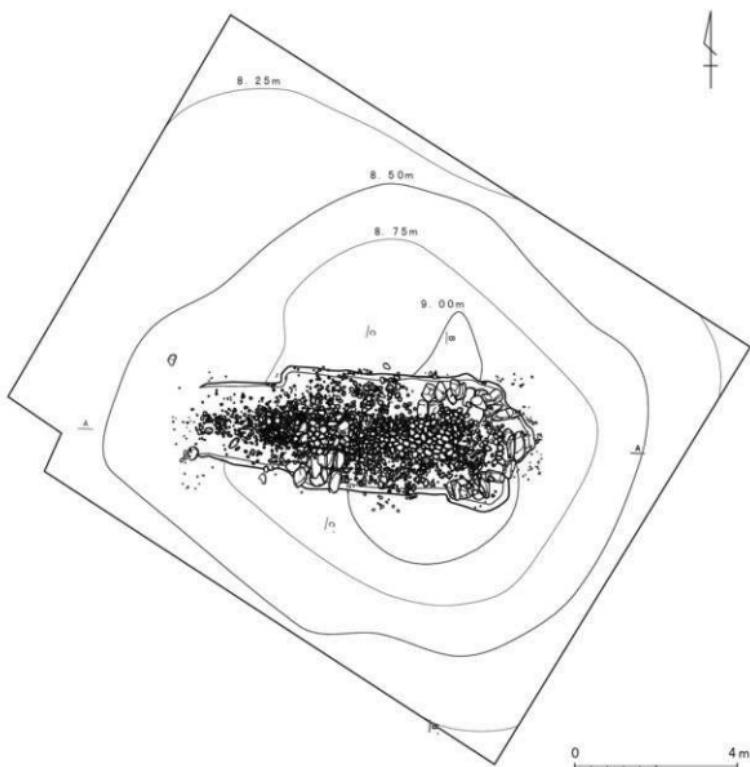
墳丘の構築土層は、主軸に沿ったトレーナー（TRE 1）と、主軸に直交するトレーナー（TRE 2）および、調査区南東端に設定したテストピット（TP 1）で確認を行った（第5図）。トレーナーは地山まで掘り下げて、埋葬施設の構造や盛土の状態を観察し、テストピットは地山からさらに1.2mほど下まで掘り下げた。地山（7層）はわずかに土を含んだ小砂利層で崩れやすく、墓坑内の埋土はほとんど土を含まない径2cm以下の小礫（6層）で構成され、その上には暗紫灰色土（5層）が水平に盛土されていた（第8図）。初葬時の床面（床面1）は、大きさの異なる海浜礫を用いた2層の礫床を組み合せて構成されており、その間には粉状の褐色土を含む小砂利層が厚さ3cm程度に渡って挟み込まれている（層厚が薄すぎるため、土層図には示されていない）。

残存する盛土を観察すると、地山の上には小礫混じりの暗青灰色土（4層）が薄く盛られていた。この土層は、床面を構成する5層の上に重なる状態が看取されることから、床面構築後に盛土されたと考えられる。またセクションB-B'ラインを見ると、内側では厚く、外側へ向かって薄く水平になっていく状況が観察される。さらに埋葬施設奥側では、墓坑の張り出し部分辺りまでほぼ水平に盛土され、その上に石材が設置されていた。これら4層の残存する範囲は、南東側で墓坑ラインから約1.1m外側まで、東側で約2.5m外側まで認められたことから、現状で復元される盛土の平面形は梢円形に近いものとなる（墳端は確認されていないため、本来の正確な形状は不明）。

4層の上には3層および2層が盛土されていた。どちらも径6mm以下の小礫が含まれているが、2層は小礫と径5~6cmの扁平な礫が層状に含まれている。盛土に使用されている土は、どれも小礫が多く混じって締まりが弱く、粘土質の土は確認されなかった。



第5図 調査区位置図およびトレンチ・テストピット設定期



第6図 古墳全体図

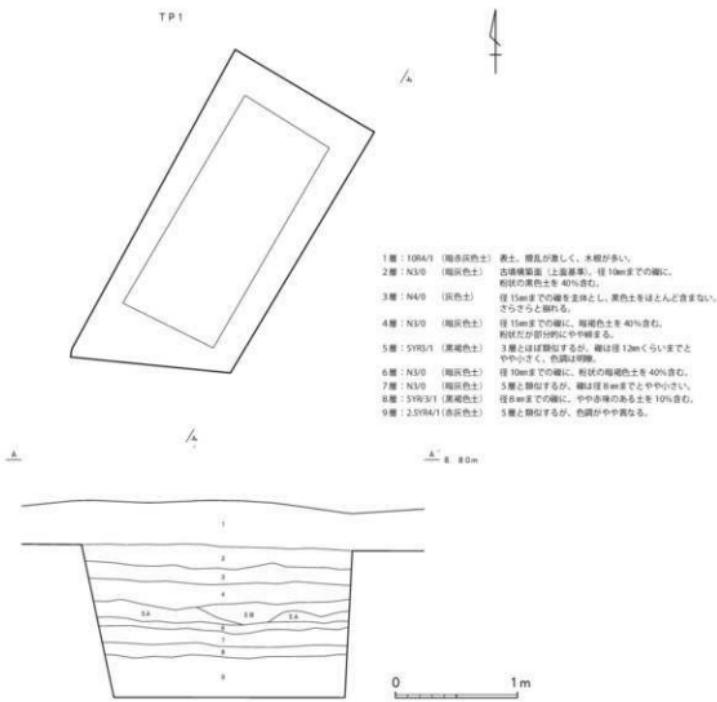
(2) 周溝

今回の調査では、周溝と考えられる遺構は検出されなかった。ただし、看護学校の建設に伴って行われた平成16年度の調査において、本調査区南側および南東側に設定されたトレンチ内(TRE 7・8・10)から、性格不明の溝址が検出されている。この溝は古墳との位置関係から、古墳の周溝となる可能性が高いが、詳細は不明である。

第2節 埋葬施設

松長6号墳の埋葬施設は、施設を構成する石材の多くが失われ、本来の姿をほとんど留めていなかった。残存していた基底石から2段目までの積石の一部、および初葬時を中心とする礫床だけでは情報が限られており、正確な構造や規模は不明である。そこで、以下に詳細な観察結果を記述しながら本来の埋葬状況を推定していく。

ただし本埋葬施設の構造は、解釈の難しい複雑な様相を呈しているため、特定の埋葬施設に当ては



第7図 テストピット実測図

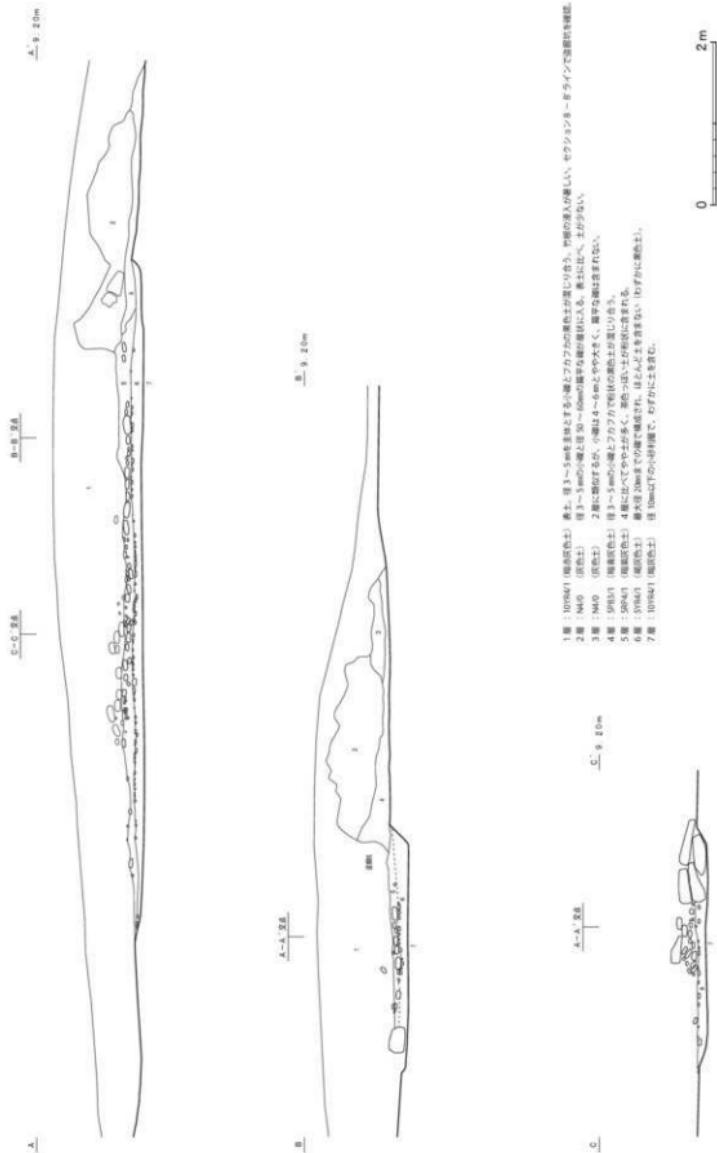
めて考えられるものではなく、施設を構成する各空間や各部位の規定が非常に困難であった。そもそも石材の検出状況から、“石室”または“櫛”的どちらの捉え方も可能であるという点が、解釈をより難しいものにしている。ただし、羨道（もしくは、埋葬時の出入りに使用された墓道や横口）に相当すると考えられる構造や、墓室空間への出入口を閉塞する行為、追葬行為が認められる点から、横穴式埋葬施設の概念は導入されているものと理解される。そこで記述の際には、横穴式石室で用いられる名称に準じた記載を行うこととする（その際の各部位の名称や計測位置については、凡例を参照）。

それに伴い、最奥の石材から閉塞行為の認められる部分（右側で掘り方のわずかな屈曲が認められる部分）までを玄室、それより西側を羨道に相当する施設として記載した。全体構造や築造・埋葬の工程など、本節を通してある程度の推測が成り立つ点については、第V章に見解をまとめる。

（1）埋葬施設の構造

①石材と規模

埋葬施設は、主軸をほぼ東西方向に向ける。石材は、愛鷹山麓に築造された後期古墳と同様にディサイト製の亜角砾が用いられていた。しかし、下流で調達されたものを使用しているためか、愛鷹山麓源



第8図 土層セクション図

流部のものに比べると角が取れてより丸味を帯びており、薄く華奢な印象を受ける。

検出された埋葬施設の全長は8m、幅は最大3.2mである。玄室に相当すると考えられる部分の長さは5.6mで、羨道に相当すると考えられる部分の長さは2.4mを測る。上部の構造が全く残っておらず、施設を構成する石材も2段しか確認できることから、高さは不明である。掘り方の長さは8.4m、幅は最大3.4mであった。

②奥側に設置された石材

奥側に配された5点の石は、水平に敷かれた埴丘盛土の上に設置されており、掘り方底面に密着するように設置された他の基底石とは据えられた工程が異なるものと考えられる。最も大形である最奥の石材は長さ73.2cmを測り、横口面を内側に向け、中央の長軸ライン上に設けられた墓坑の張り出し部分に配されている。これら5点の石は、左右に設置されている石材に比べるとやや大形ではあるが、厚さについては20cm以下と薄い。基本的には横口面を内側に向けるが、長さ70cmを測る左端の石は小口面を内側に向けていた。最奥の石材の手前にも石材が据えられていることから、本来は2列に渡って石材が並べられていたものと思われる。石材の形状や据え付け方を見ると、この上にさらに石材が積み上げられていた状態を想定するのは、少々無理があろうか。

③左右に設置された石材

残存状況が非常に悪く、中央付近では左右すべての石材が失われていた。残存する石材も、一部で2段目まで確認できるものの、ほとんどは基底石しか残されていない。長さ50cm前後で、厚さは20cmに満たない扁平な石材が多く、小口面を内側に向け、2列に並べて配置されている。隣接する石材どうしは不規則に重なり合っているが、内側の列は小口面をきれいにそろえて並べられていた。これらの石材はほぼ同大であるものの、より詳細に大きさを検討するならば、奥側の石材に比べて中央に近い石材の方がやや大きく、手前の石材の方がさらに大きいという傾向が認められる。玄室に相当する部分の入口付近では、石材による著しい屈曲は見られない。また、羨道に相当する部分では石材が全く検出されておらず、据付痕跡も確認できなかった。

基底石は、地山（7層）に軽くねじ込むように設置され、掘り方底部にはほぼ密着していた。崩れやすい地山をわずかに掘り込んだだけの墓坑（掘り方）にもかかわらず、奥側に設置された石材と同様に基底石を安定的に据えるための造作は認められていない。このような状況で、さらに数段の石材を積み上げていくことは可能であろうか。石材の抜き取られた部分や床面上に散在している小礫は、裏込め石として使用されていたものと思われる。

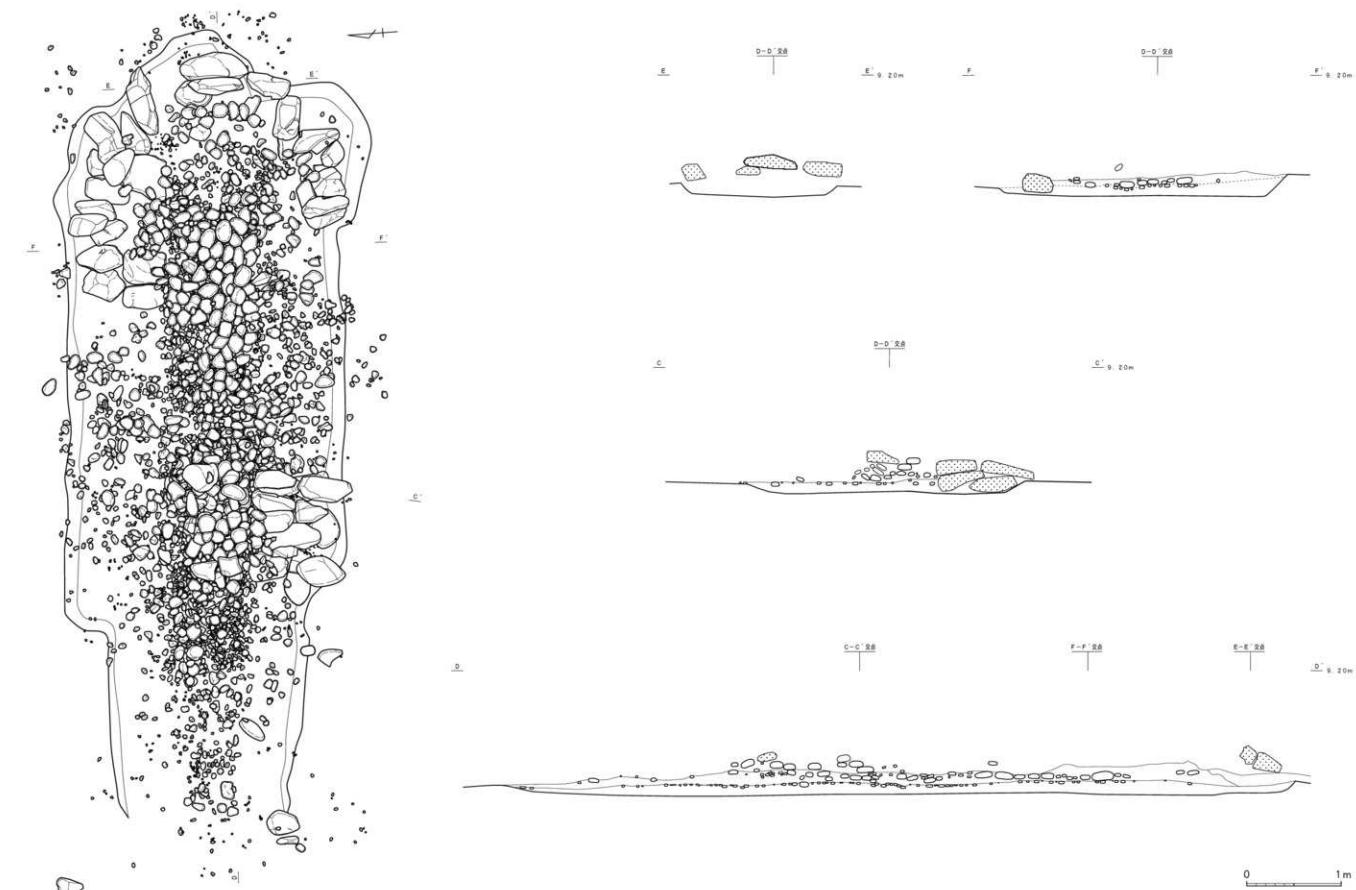
④墓坑（掘り方）

平面形は長方形状を呈し、奥側が弧状に張り出している。深さは最も深いところで0.24m、平均して0.18m程度を測り、地山である自然堆積の砂利層を掘り込む。基底石が完全に納まりきらない程度の浅い掘り込みで、奥側の張り出し部分では、その掘り込みに石材を固定するのではなく、埋め戻したうえで石材が据えられていた。このような掘り込みでは、石材を配置する際の目安程度の機能しか果たしておらず、墓坑というより掘り方と呼ぶ方が妥当である。

玄室に相当する部分の入口付近はわずかに屈曲しているが、発掘調査時、特に左側の屈曲部から羨道に相当する部分のラインは非常に不明瞭で、プランの把握が困難であった。検出状況を見る限り、墓室空間との境界を明確に示すような著しい屈曲が認められる状況とは言い難い。

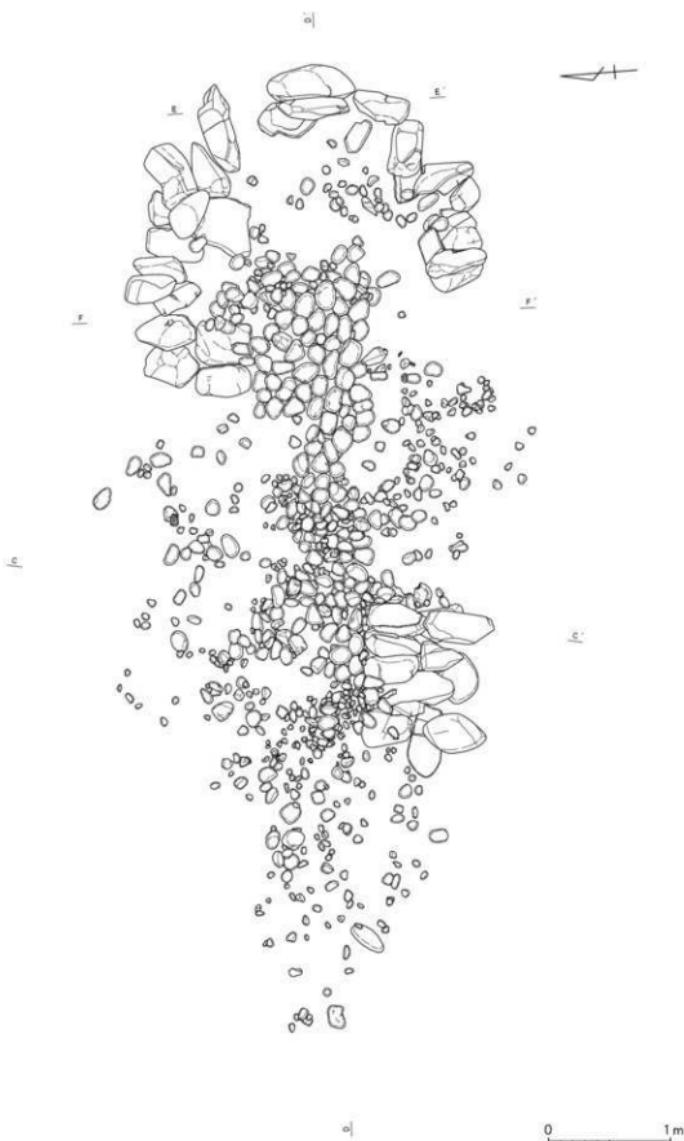
⑤床面

床面は2面が確認されたことから、初葬時の床面を床面1、追葬時の床面を床面2と呼称する。砂岩製または頁岩製の海浜礫を用いた礫床で、床面1は異なる大きさの礫を用いた2層の礫床を組み合わせることで床面を構成している（下から、床面1-A・床面1-Bとする）。



第9図 石室実測図





第11図 床面1-B実測図



第12図 床面2実測図

床面の平面形は長台形状を呈する。幅は奥側で1.1m、中央付近で約1m、閉塞部付近で約0.9mを測り、奥から手前に向かってわずかに幅を減していく。

床面1-A

墓坑埋土である褐色土に、拳大以下の海浜礫が敷かれている。これらの礫は、奥側に据えられた石材の約0.95m手前から、約4.9mの範囲に渡って密に敷かれており、最奥では礫が希薄となる。地山および墓坑埋土は、ほとんど土を含まない砂利や小礫で構成されていることから崩れやすいが、その上に密な敷石を施することで床面の基礎を構築し、棺の設置に適した土台を整えている。

床面1-B

径15~25cm程度を主体とした海浜礫が敷かれている。床面1-Aと同様に、奥側に据えられた石材の約0.95m手前から密な敷石が施されているが、密な状態は閉塞部付近までしか続いていない。残存する敷石を観察する限り、礫の敷き分けがなされているよう、奥側の石材から約3mの地点までは径18~25cmほどの礫、その地点より手前側は径15~20cmほどのやや小振りな礫を主体とする傾向が認められた。また残存状態のよい部分では、東西方向から見ると礫が緩やかに湾曲しながら並んでおり、棺の設置されていた状態を想像させる(セクションF-F)。

また床面1-Aと1-Bの間には、敷石を固定するための工夫として、粉状の褐色土を含む径8mm以下の小砂利層が厚さ3cm程度に渡って挟み込まれていた。このように初葬時の床面は、大きさの異なる海浜礫を用いた2層の礫床の間に、褐色土を含む小砂利層を挟み込んだ多層構造となっており、棺を設置するために丁寧な造作を行っていた様子がうかがわれる。

床面2

盗掘や後世の造成の影響により、ほとんど礫床が残されていない。残存するわずかな礫を観察すると、床面1-Bに用いられた海浜礫に比べてやや小形であった。この礫床は、閉塞部の方向へ向かって斜め上に傾斜していく状態が看取されることから、閉塞行為の後に構築されたことがわかる。従ってこの床面は、追葬時に伴うものと考えられる。ただし、追葬時に伴うと考えられる遺物は模倣坏1点しか発見されておらず、追葬時の状況は不明な点が多い。

⑥閉塞部

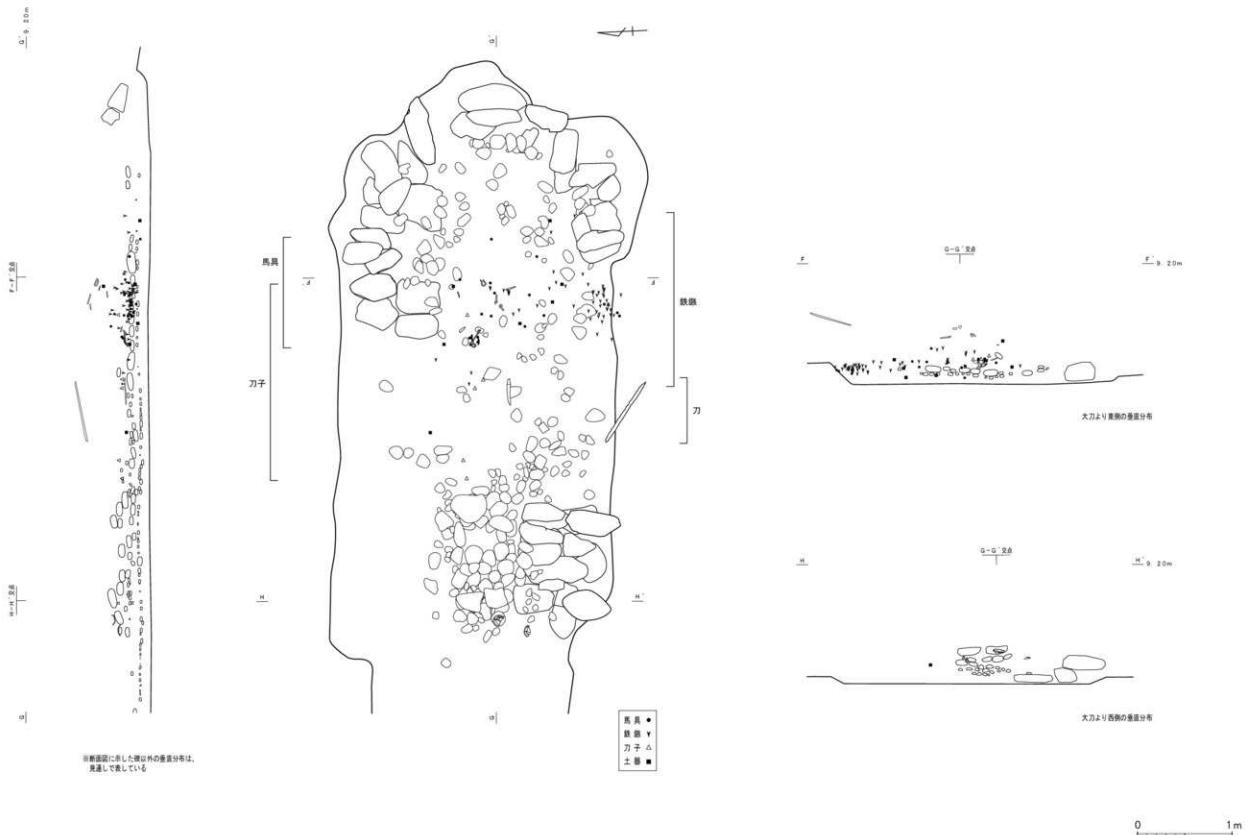
玄室に相当する部分の入口付近では、床面1-Bの敷石の上にさらに海浜礫が積み重なっていた。礫は床面1-Bの敷石と同大かわずかに大きい程度で、敷石との明確な差異は認められない。初葬時にこれららの礫を閉塞石として用い、墓室空間への出入口を閉塞したものと考えられる。

また、閉塞部の手前では削れた状態の模倣坏が発見されているが、土器の年代から初葬時ではなく、追葬時(床面2)に伴うものと考えられる。

⑦玄室に相当する施設の入口構造と羨道に相当する施設の構造

玄室に相当する部分の入口付近から羨道に相当する部分にかけての構造を観察すると、掘り方(墓坑)に目立ったレベル差は認められず、ほぼ平坦に推移している。また、樋石のような仕切石や、立柱石も確認されていないことから、墓室空間を明確に区切るための格別な造作は施されていないようである。

羨道に相当する部分は、やや不明瞭ながらも玄室に比べて掘り方プランが狭まる状況が認められた。現状では天井構造が不明であり、玄室に相当する部分との境界に明瞭な仕切り等は設けられていないことから、横穴式石室に設けられるような、いわゆる羨道部空間としては未発達な状態といえる。従ってこの部分は、おもに埋葬時の出入りに使用される通路としての機能を持ち、小口部分に取り付けられた墓道もしくは横口的な役割を果たしていたものと考えられる。



第13図 遺物検出状況図（全体図）

(2) 埋葬施設内部の遺物検出状況

①棺と遺物の検出状況

床面1-Bに施された敷石は、奥側に据えられた石材の約0.95m手前から閉塞部付近にかけて密に敷かれていたことから、棺はこの範囲内に設置されていたと考えられる。棺材は全く残されていなかつたが、東西方向から見ると敷石がわずかに湾曲しながら並ぶ状態が看取されたことから、舟形もしくは削竹形の棺が想定される。

埋葬施設内部からは、副葬遺物として土器と金属製品が検出され、そのほとんどは床面1-B上で出土した。遺物の分布範囲は敷石が密に敷かれた範囲に集中しており、最奥の敷石が希薄な部分では出土していない。ただし、盗掘の被害を受けている影響で、遺物の大半は本来の配置から移動していると考えられる。盗掘坑跡は、TRE 1・2を掘削している際、右側奥寄りの石材が抜き取られている付近から、左方向に向かって確認された。そのため、奥寄りに配置されていたと思われる遺物については、床面外に放置されているものが多く見受けられた。また、表土の流れ込みや後世の造成により、床面からかなり浮いた状態で検出されたものもある。

各遺物の詳細な観察結果や年代の検討は第3節で行うこととし、まず以下に、各遺物の検出状況をまとめる。

②土器の検出状況（第15図）

検出状況の特徴として、出土数の非常に少ない点が挙げられる。器種が明確に判明するものは、閉塞部の手前で見つかった土師器模倣环1点（第16図1）のみで、その他は少量の土師器片が出土するに留まっている。模倣环は大きく2つに破碎しており、中央に近い方の塊は内面を上に、その南側の塊は外面を上にしていた。土器の年代から、追葬時に副葬されたものと考えられる。その他に出土した土師器の小片7点は、大半が床面1-B上付近で検出されているものの、施設外から流入した可能性もあり、副葬土器の総数は判然としない。

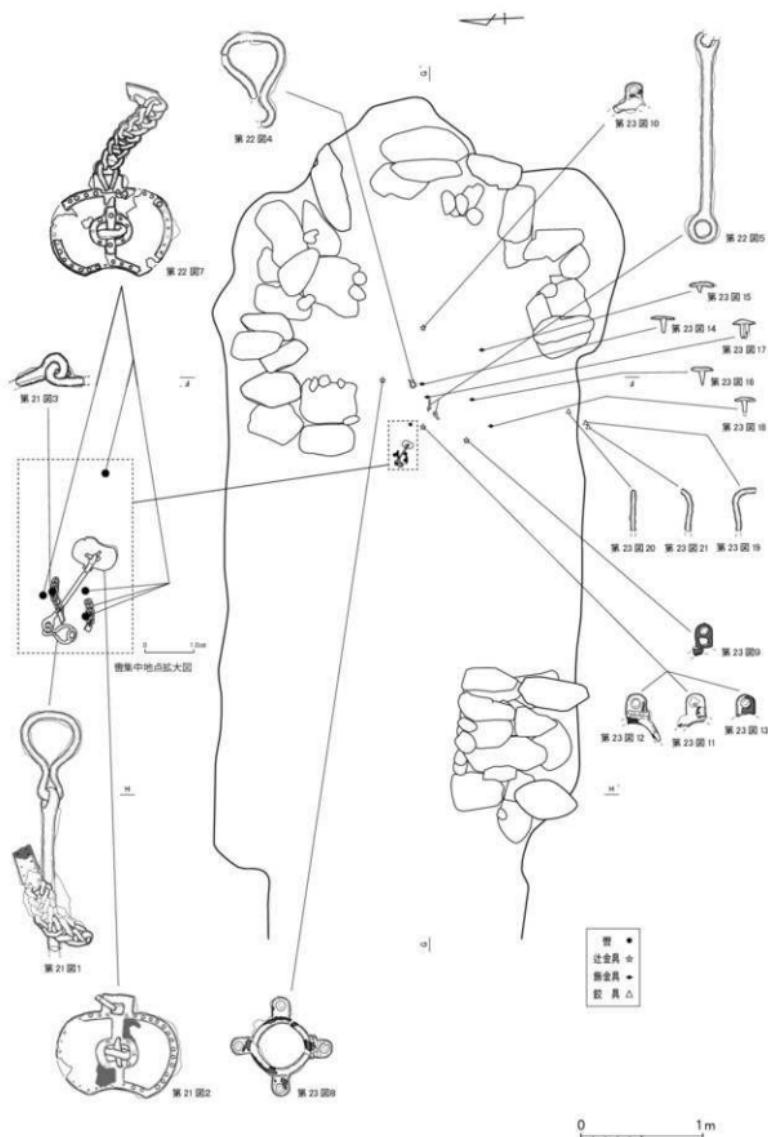
③馬具の検出状況（第14図）

馬具は金銅装内湾檜円形鏡板付轡・金銅装辻金具・飾金具・鉸具が出土した。中央より奥側に、すべての遺物が分布している。

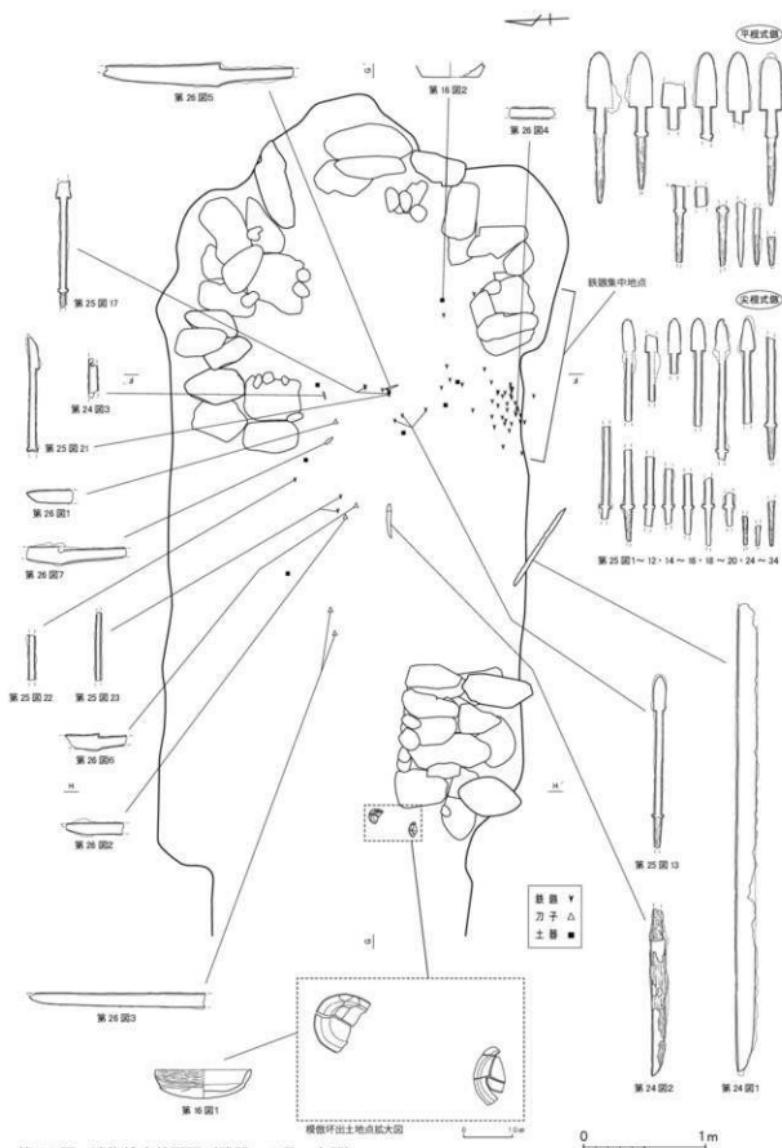
轡（第21・22図）は一部が表土中に巻き上げられていたものの、大部分が床面1-B上で検出されており、中央の長軸ラインよりほぼ左側に分布していた。轡Bは部品が散在し、鏡板も細かく割れるなどしていたが、中央寄りに固まっていた轡Aおよび轡Bの一部は、副葬時の位置や状態に近いものと思われる。辻金具（第23図8～13）は、3～4個体分が確認されている。各個体が散在しており本来の配置は不明であるが、最も左側で検出された辻金具（第23図8）は、ほぼ元の形状を保った状態で割れ、墓坑埋土内に沈み込んでいた。飾金具（第23図14～18）は、5点が出土している。中央の長軸ライン付近から右側にかけて散在しており、本来の位置からは大きく移動している可能性が高い。3点が検出された鉸具（第23図19～21）の一部は、右側の掘り方ライン際に放置されていた。

④武器類の検出状況（第15図）

武器は鉄製の大刀1点、小刀2点と、鐵鎌34点（少なくとも16本分）が出土した。盗掘の際に放置されたと思われる大刀（第24図1）は、右側の掘り方ラインから外にほとんど投げ出され、床面から浮いた状態で発見された。装具は全く見つかっておらず、鉄製の刀身のみが出土している。小刀のうち、中央の長軸ラインよりやや右側で出土したもの（第24図2）は、盗掘坑跡からわずかに外れたところに位置し、切先を真っ直ぐ閉塞部側に向けた状態で床面1-B上から見つかっており、本来の副葬位置を保っている可能性が高い。



第14図 遺物検出状況図（馬具）



第15図 遺物検出状況図（武器・工具・土器）

鉄鎌（第25図）は、大半が中央よりやや奥側寄りで検出されたが、なかでも右側の石材が抜き取られた部分に集中しており、ほとんどが折れて散乱していた。鎌の進行と砂利の付着が激しいため保存状態は悪かったが、接合を進めた結果、総数を34点まで絞ることができた。そのうち鎌身部が確認できるものは16点（平根式鎌7点、尖根式鎌9点）であったが、さらに茎間が認められるものを含めると、本来は約20本ほどが副葬されていたと考えられる。

⑥工具類（第15図）

工具としては、刀子7点（第26図）が出土した。切先と茎尻を欠損するが比較的残存状態のよい1点に加え、切先片や茎の一部が検出されており、3～4個体分にのぼると考えられる。中央の長軸ラインより左側で検出されているものが多く、盗掘坑跡から離れた位置のものは、ほぼ床面1-B上で検出されている。轡集中地点から閉塞部の近くまで広く分布しており、本来の副葬位置は不明である。

⑦副葬位置

以上の観察結果より、埋葬施設内部において、馬具と刀子は左側、刀と鉄鎌は右側を中心とする検出状況が認められた。左側では、床面1-B上から轡がある程度、連結した状態で出土しており、本来の位置に近いことが想定される。また右側では、鉄鎌がまとまって検出され、中央よりやや閉塞部寄りの位置で小刀が検出された。ほとんど埋葬施設の外に投げ出されている状態であった大刀は、小刀に比較的出土位置が近く、小刀と並べて置かれていた可能性が考えられる。

被葬者が頭部を奥側に向けた状態で埋葬されていたとすると、被葬者の右手側に馬具と工具、左手側に武器類というように、おおよその配置を想定することができる。

第3節 遺物

松長6号墳に副葬されていた遺物は、土器と金属製品を主体としており、特に金属製品は種類・数量ともに豊富である。なかでも金銅装の馬具は、古墳被葬者の性格や階層を示す威信財という意味を持つだけでなく、轡や辻金具の種類じたいが非常に特殊なものであり、編年的位置付けや入手ルートなど注目すべき点が多い。ただし、盗掘の被害を受けていることから、本来の副葬品組成は不明である。

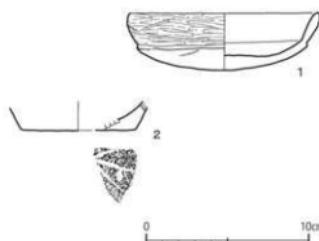
以下に、出土した副葬遺物の種類と点数をまとめ、それぞれ詳細に観察していく。

土 器	土師器：模倣壺1点・破片7点 須恵器：破片4点（副葬遺物かは不明）
金属製品	馬 具：金銅装内湾構円形鏡板付轡1式・金銅装辻金具6点（3～4個体分？）・ 飾金具5点・鉗具3点（同一個体の可能性が高い）
	武 器：鉄製大刀1点・小刀2点・鉄鎌34点（最少で16本分、本来は20本程度？）
工 具	刀子7点（3～4個体分）

（1）土器

埋葬施設内部から出土した土器のうち器種が明確なものは、閉塞部の手前で発見された土師器模倣壺1点（第16図1）のみで、須恵器は1点も出土していない。その他に、口縁部と底部（第16図2）を含む土師器片7点が出土しているが、胎土から2個体に分けられるものと考えられる。これら破片の多くは床面1-B上に分布していたが、点数が少なく、埋葬施設内部には大量の表土が流れ込んでいたことから、副葬土器と言いくることはできない。

また、墳丘表土やトレンチ内からは須恵器片がわずかに出土しているが、周辺からの流れ込みの可能性も考えられ、古墳に関係するものであるかは判然としない。



第16図 埋葬施設内出土土器実測図

①副葬土器

土師器模倣環（第16図1）

【形態と手法】

第16図1は接合したところ、ほぼ完形となった。口径11.5cm、器高3.5cmで、丸底を呈する。底部から口縁部にかけて緩やかに内湾しながら立ち上がり、器形全体は半球形状を呈するが、体部中位でやや強く屈曲する点を特徴とする。内面は最後にナデによって整えられており、特に口縁部および口端部は丁寧になでられている。外面はヘラケズリによって体部中位の屈曲部が明瞭に作り出され、上半部は横方向のヘラミガキが密に施される。焼成は良好であるが、全体の形状はやや歪んでおり、造りは粗雑である。

【位置付け】

須恵器杯蓋を模倣したもので、体部でやや強く屈曲し、口縁部にかけて内湾しながら立ち上がる点が、「内湾口縁环」と呼ばれる模倣环に類似している。これは山本編年（山本1995）の环B3類にあたり、陶邑編年MT15型式期ごろに出現し、TK43～TK209型式期から土師器环の主体となっていくものである。縮小化が認められ、造りも粗雑である点を踏まえると、その編年的位置は7世紀前半に求められるであろう。従って、この环は追葬時に副葬されたものと考えられる。内湾口縁环は、県東部地域や山梨県の甲府盆地周辺に独自の形式として定着した环であることから、副葬遺物のなかでは強い在地性を示すものといえる。

②その他の土器

土師器（第16図2）

盗掘坑跡が検出された埋葬施設右側寄りの床面1-B上付近で、木葉痕を伴う底部片（第16図2）が見つかった。同一個体と思われる破片1点も墓坑埋土に沈み込んだ状態で出土しているが、施設外から流入した可能性もあり、副葬土器の一部であったかは不明である。非常に軽量で、胎土には白色砂粒を多く含む。

須恵器（第17図1～4）

第17図1～4は、埋葬施設外から発見された須恵器の破片である。腰胴部の一部と推測されるが、それぞれ胎土や調整に違いが認められることから、複数の個体が存在するものと考えられる。埋葬時に



第17図 埋葬施設外出土土器実測図

第2表 土器観察表

回路No.	種類 西暦	出土地点	口径 最高 底径	胎土	焼 成 色	残存 部位	形態の特徴	手法の特徴	備考
第16回 1	土器部 縦型好	周塞部 手前	11.5 3.5 10.7	密	良 7.5YR7/6 (褐色)	ほぼ 完形	底部は丸窓を呈する。口縁部にかけて 緩やかに内溝しながら立ち上がり、全体が半球形を呈するが、体部中位で やや強く屈曲する。	内面：ヘラケズリ・ヘラミガキ →ナデ 外側：ヘラケズリ→ヘラミガキ	山本編作の 序B3号
第16回 2	土器部	床面 1-8	— — (7.0)	密 (白熱灰 少塵にむか)	良 SYR6/4 (にぶい褐色)	底部	丸窓の底面から、体部が外傾して立ち 上がる。	外側：底部木葉痕	
第17回 1	頂東面 (裏?)	表深	— —	密	良 内面：2.5Y4/1 (黄灰色) 外面：50Y2/1 (オリーブ黒色)	頭部		内面：ナデ 外側：平行タタキ	
第17回 2	頂東面 (裏?)	TRE1	— —	密	良 内面：2.5Y4/1 (黄灰色) 外面：SY5/1 (灰色)	頭部		内面：ナデ 外側：平行タタキ	
第17回 3	頂東面 (裏?)	TRE2	— —	密	良 内外面：2.5Y6/2 (灰黃色)	頭部		内面：ナデ 外側：平行タタキ	内面に自然釉
第17回 4	頂東面 (裏?)	TRE3	— —	密	良 内面：2.5Y5/2 (暗紅黄色) 外面：2.5Y6/1 (にぶい褐色)	頭部		内面：ナデ 外側：平行タタキ	外側に自然釉

（ ）は推定値を表す

行われた葬送儀礼に用いられたもの、または周囲から流入したものであろうか。4点とも外面に叩き板を使用した平行タタキが施され、内面はナデ調整が行われている。第17回3は内面、4は外面に自然釉が認められる。

（2）金属製品

本古墳の土壌は塩分を多く含んでいることから、鍍の進行が著しく、多くの製品で小礫（砂利）の融着する状態が認められた。従って、各製品の遺存状況は決して良いとはいせず、明確な形状や構造を把握することは非常に困難であった。

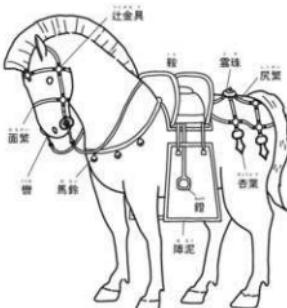
①馬具

金銅装内湾槽円形鏡板付轡・金銅装辻金具・飾金具・鉸具が出土した。これらは面繁に関連したものである可能性が高く、杏葉や雲珠は検出されていない。

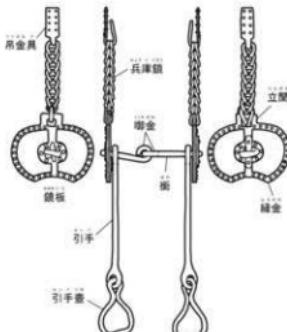
実測図は、X線写真などを使用して詳細な図を描くよう努めた。欠損部分のうち想定可能な部位については破線で示している。また轡のうち、接合した状態で実測することが困難なものは、接合せず別々に実測を行い、接合関係を図中に示している。従って、すべての部品が連結した状態の全体構造は、模式図（想定含む）を参照されたい。

轡—金銅装内湾槽円形鏡板付轡—（第20回1～第22回7）

保存状態は良好とは言えないが、轡一式がほぼ遺存しており、左右の組合せを含めた全体の構造を復元することが可能である（第20回）。修理痕が数か所に確認されており、修理後の状態で副葬されたことがわかる。その影響を含めて、左右の構造や法量には相違点が認められることから、対比しやすいよう左右の轡にそれぞれ轡A、轡Bという名称を設定した。



第18回 馬具の名称と構造 (文化21年1月改定)



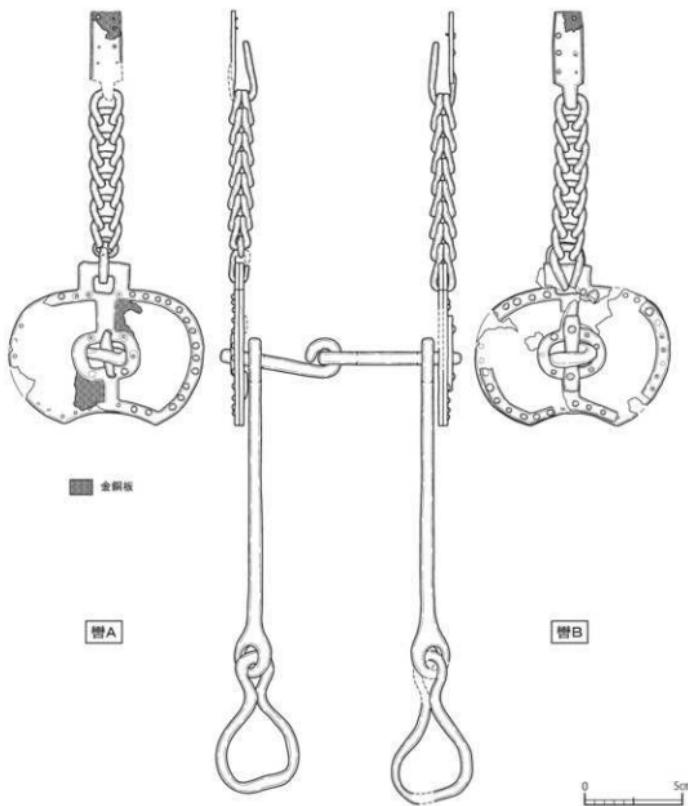
第19回 轡の名称と構造

轡の構造としては、金銅装の内湾楕円形鏡板に2連式の衝が取り付けられ、鏡板の内側で衝先環に引手が連結し、引手の先端には別造りの瓢形引手壺が連結する。また、立間にには面繫連結装置として兵庫鎖が取り付けられ、その先端には面繫を固定するための吊金具が付いている。

【鏡板】

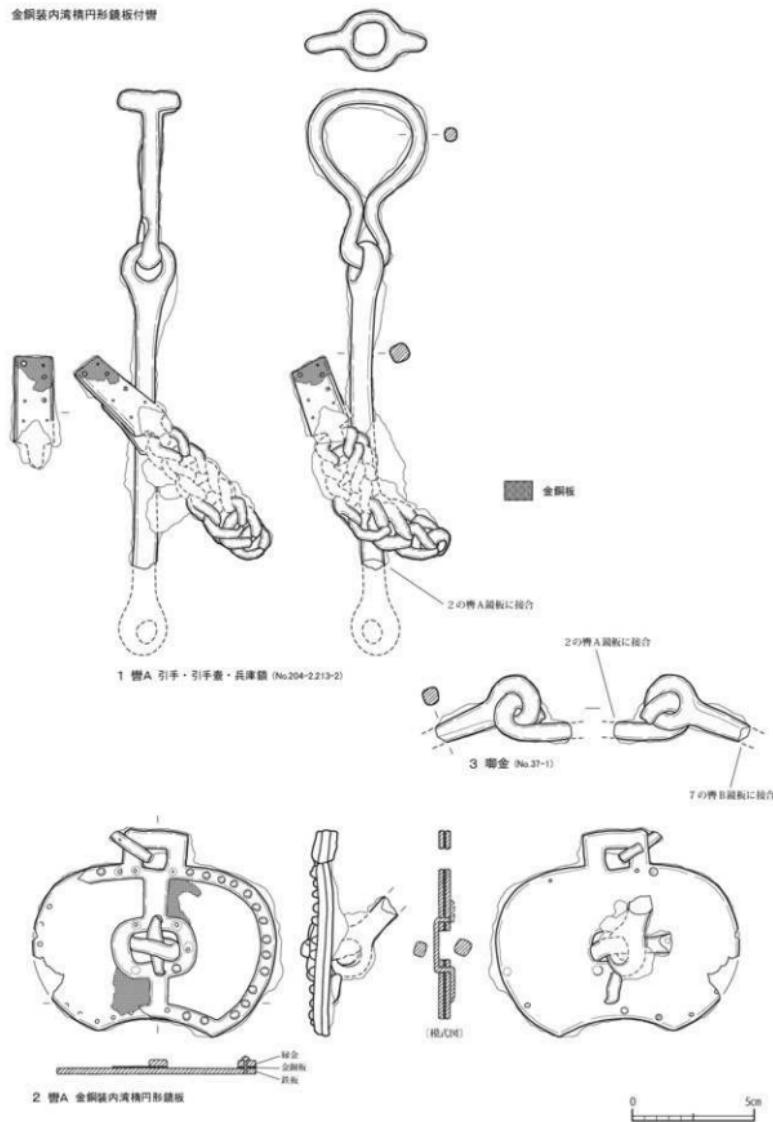
第21図2と第22図7の鏡板は鉄地金銅張で、楕円形状を呈し下縁が内側に湾曲することから、種類としては“内湾楕円形鏡板”に分類される。その構造は、鉄製の地板に薄い金銅板を被せ、さらに別造りの縁金を乗せて鍛留するものである。金銅板の残存する部分を観察すると、縁金の下に金銅板が挟まれていることから、別造りの金銅板を被せる古式の手法を採用していることがわかる。縁金には金銅板の痕跡が認められず、金銅板が被せられていたかどうか不明である。

鏡板の大きさは、長さが約8.3cm、横幅が約10.0cmを測る。下縁の抉りの深さは0.6cm程度で、抉り部分の両端は尖っている。立間は長さ1.3cm、横幅2.7cmほどで、面繫連結装置（兵庫鎖）を取り付け

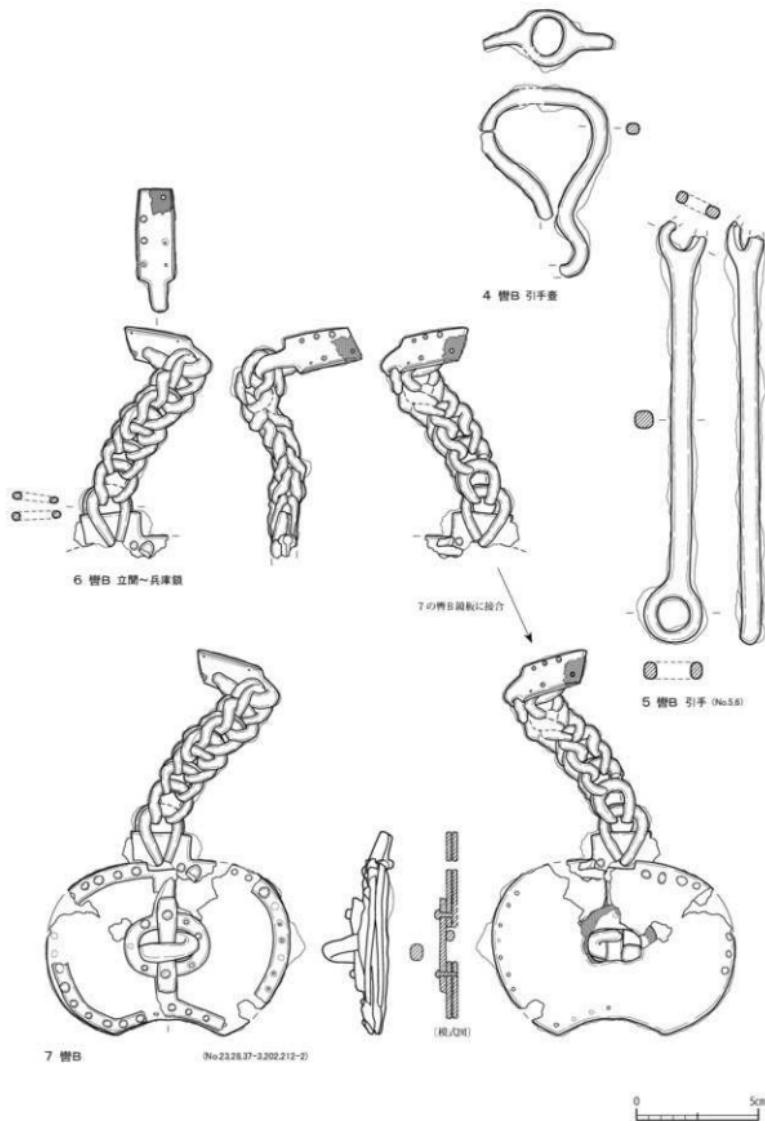


第20図 松長6号墳出土轡 模式図

金銅装内溝横円形鏡板付骨



第21図 馬具実測図（1）



第22図 馬具実測図（2）

そのため方孔が設けられている。また鏡板の中央には、銜を通すための円孔が縦1.3cm、横2.1cm程度に渡って存在する。鉢は鋸の影響で形状や大きさにばらつきが出ているが、鉢頭の直径は3.0～4.0mm程度と推定され、裏側には先端のつぶれた鉢脚が観察された。これにより金剛板と縁金は、かしめ鉢を用いて鉄板に固定されていることがわかる。残存する鉢の配置から推定すると、鏡板の縁には36本程度の鉢が、中央の円孔周囲には6本の鉢が打ち込まれていたものと思われる。この種の鏡板に用いる鉢は銀被せとするのが一般的と考えられるが、鋸の進行が著しく肉眼観察では確認できなかった。

轡Aと轡Bにおける最も大きな違いは、中央の円孔から通した銜先環と鏡板の連結方法である。轡Aは長い棒状の金具を鏡板の裏まで貫通させて嵌め込むのに対し（第21図2）、轡Bは扁平な短い棒状の金具を鉢で留めることで銜を固定している（第22図7）。轡Bの技法は、金剛装のF字形鏡板付轡や（内湾）楕円形鏡板付轡によく見られることから、製作時の形態が保たれた状態であり、轡Aの技法は鉄製の楕円形鏡板付轡に見られる簡易な技法であることから、修理時に採用された形態であると考えられる。轡Aの嵌め込み式の金具は、本来、棒状の金具を留めていた鉢が抜けた部分を利用して貫通させているように見える。その他にも、轡AとBでは縁を巡る鉢の配置にわずかな違いが認められた。

【引手】

第21図1と第22図5の引手は、鏡板の内側で銜と連結し、先端には別造りの瓢形引手壺が取り付けられる。長さは約17.5cm、厚さは最も太い部分で8.0mmを測り、軽く面取りされていることから断面は正方形に近い。銜と連結する円環は外法で直径2.5cm、引手壺を取り付ける円環は直径2.2cm程度であり、引手壺側の円環の方がやや小さめに造られていた。この両端の円環は、互いが45度ほど向きを違えるように鍛接されており、銜と連結する円環は、轡を馬へ装着した際に下側となる方へ、わずかに曲げられているように見える。

第21図1と第22図4の引手壺は瓢形を呈し、上部に手綱を連結するための円孔が設けられる。轡A引手壺は長さが7.4cm、横幅が最大4.8cmほどであるのに対し、轡B引手壺は長さが7.7cm、横幅が最大5.1cmほどで、大きさにやや差異が認められた。轡B引手壺の円孔部分は、手綱との摩擦で磨り減ったのか、他の部分に比べ細くなっている。また、実際に馬へ装着した状態を復元すると、引手両端の円環が45度方向を違えている影響で、引手壺はやや内側を向くことになる（第20図）。

【面繫連結装置】

面繫の連結には兵庫鎖が用いられる。第22図6を見ると、鎖は8連から成り、立間に繋がるいちばん下の鎖のみ、やや長めに造られている。鋸のために明瞭な形状や大きさが把握しづらいが、断面は円形で、厚さは3.0mm程度と思われる。本来の形態は前述の通りであるが、轡A兵庫鎖（第21図1）は7連しかなく、いちばん下の鎖に代わって直径1.2cmほどの細い輪金が取り付けられていた。また立間には、先端を折り曲げた幅5.0mmほどの金具が一部残されている（第21図2）。先端部を欠損するため、正確な長さや兵庫鎖への取り付け方は不明であるが、おそらくC字状に折り曲げた両端を立間と兵庫鎖の金輪に引っ掛けることで、鏡板と兵庫鎖を繋いでいたものと推測される。

鎖の上部には、面繫を固定するための吊金具が取り付けられている。この金具は板状の部分が鉄地金剛張で、被せられた金剛板は裏側へ折り返されていた。側面にテーパー加工が施され、金剛板と面繫を固定するための鉢が8本打ち込まれている。この鉢は鉢頭が直径3.0～4.0mm程度で、肉眼では鉄製ということしか確認できなかった。鉢脚の先端は、面繫を強く固定するために曲げられているようである。

【銜】

厚さ7.0mm程度の鉄棒を2本連結した、いわゆる2連式と考えられ、円環の直径は外法で2.2cm程度を測る。第21図3に示した啓金は、鏡板に残されている銜先に接合することから、轡A鏡板に連結する銜は長さ6.2cm、轡B鏡板に連結する銜は長さ7.3cmとなる。また轡A鏡板に連結する銜は啓金、轡

B鏡板に連結する衝は衝先が、それぞれ蔽手状に折り曲げられている。これは修理の際、破損した箇所をそのままにした状態で折り曲げるという簡易な修理方法で、機能部を製作したものであろう。従って、2本とも本来の長さより短くなるとともに、破損の度合いによってそれぞれ修理後の法量に差が出ているものと考えられる。現状（修理後）は、2本連結した状態で12.4cmほどであるが（第20図）、一般的な轡を参考にすると、本来は少なくとも15.0～16.0cm程度の長さを有していたのではないだろうか。

【位置付け】

内湾梢円形鏡板付轡は、古墳時代中期後葉（陶邑編年TK208型式期ごろ）から日本列島に出現し、後期前半（TK10型式期）のうちに衰退するとされる。**f**字形鏡板付轡と並行した変遷を追うことが可能であり、松長6号墳の轡に見られる、引手の鏡板内側連結法や鏡板の鉢の多さは、後期の特徴といえる。また、内湾梢円形鏡板付轡における変遷（鈴木2002）に従えば、面繋連結装置として兵庫鎖を採用している点、鏡板下縁抉り部分の両端が尖った形状を示している点で、やはり後期の特徴を有しているといえよう。さらに後期の出土事例と比較すると、松長6号墳は鉢の数が多い方であり、鏡板の高さと幅の比率に大きな差がない（顕著な横長ではない）ことから、編年的位置付けとしては、この種の轡において後出の段階（TK10型式期新相？）に位置付けられるものと考えたい。

辻金具—金銅装（貝装）辻金具—（第23図8～13）

第23図8～13は金銅装の4脚辻金具である。9～13のうち11～13は、脚部の形状が類似することから同一個体の可能性が高いが、9と10は形状や大きさにやや違いが見られることから、それぞれ別個体の可能性がある。従って、副葬されていた辻金具は3～4点となるものと考えられる。

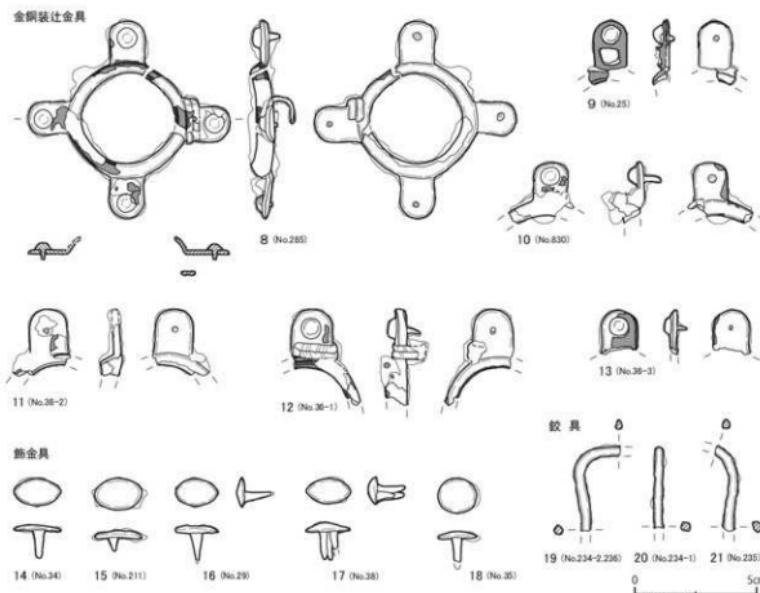
これらはすべて鉄地金銅張で、輪金に半円形の脚部を4脚付す形態をとる。輪金は高さが1.0cm前後で、8は外径が約5.0cm、内径が約3.7cmを測る。上部は幅1.5mm程度に渡って水平に面取りされており、そのすぐ下に1本、そこから4.0mmほど下にもう1本、浅く細い溝が巡っている。脚部には鉢が1本打ち込まれ、鉢頭は直径8.0mm、高さ4.0mm前後となる。わずかに金銅張の痕跡がうかがえるようにも見えるが、肉眼では判然としない。輪金との境界に取り付けられた2条の貴金属は、幅3.0mmほどの棒状を呈し、断面は蒲鉾形である。表面に刻みが入れられており、2条を合わせることで矢羽根状を呈する。

これら辻金具は、貝（イモガイ）の螺頭部が装着された“貝装辻金具”である可能性が高い。貝装馬具は全国的に型式差の少ない馬具とされることから（宮代1989）、貝装馬具として報告されている諸例に類似した中央部別造りの形態を採用している点で、貝が装着されていた可能性を疑う必要がある。そこで、デジタルマイクロスコープを用いてイモガイの残存状況やイモガイの装着されていた痕跡を観察したところ、残念ながら貝と思われる有機物は残されておらず、イモガイの痕跡として指摘されている縱方向の線状痕（宮代2010）も明瞭には観察されなかった。ただし、輪金の内側に見られた薄い線状痕は、螺頭部の痕跡である可能性があろう（写真図版PL.8）。

【位置付け】

貝装馬具が朝鮮半島から日本列島に導入されたのは、古墳時代後期（陶邑編年MT15型式期）であり、TK217型式期には急速に衰退するとされる。辻金具と雲珠は導入期から存在し、現在確認される出土事例は、6世紀中葉（花谷1983）や、TK10～TK209型式期段階との位置付けが示されている（宮代1989）。従って、松長6号墳もこれらの時期に相当するものと考えられよう。

鉢の装飾については、肉眼で確認することはできなかつたが、貴金属を2条有し、その上に刻みが認められる点や、金銅張りで仕上げられ、輪金に段を入れるといった装飾的要素が強い点から、やや古相（TK43型式期辺りを下限とする？）を示している可能性がある。



第23図 馬具実測図（3）

飾金具（第23図14～18）

第23図14～18の5点は、繋や手綱に取り付けられたと考えられる扁平な半球形の飾り鉢である。鉢が進行し、肉眼では鉄製としか確認できない。鉢頭の平面形は杏仁形（14～17）と円形（18）の2種類が認められ、杏仁形は長軸1.8cm前後、短軸1.1cm前後、円形は直径1.4cmを測る。鉢脚の断面は円形を呈し、長さ1.1cmほどを測るが、15は0.6cmと非常に短く、17には3本もの鉢脚が確認できる。また15・16は、鉢脚の位置が鉢頭の中央から大きく偏っていた。

鉸具（第23図19～21）

第23図19～21は、鉄製鉸具の一部である。19・21は輪金部分、20は刺金と考えられるが、3点ともに接合はしなかった。刺金は輪金に接していたと思われる端部が斜めに加工されており、残存する長さは3.4cmを測る。3点を元の形状に近い状態で並べると、下端部はほぼ同じところで欠損していることから、欠損部には鉄棒が横方向に押し込まれていた可能性がある。

【位置付け】

飾金具や鉸具の編年的位置を示すことは難しい。ただし本古墳から出土した馬具は、その種類から面繁に関連した装具である可能性が指摘できるため、これらも面繁に装着され、轡や辻金具とともに副葬されたものと考えたい。

②武器類

鉄製大刀・小刀（第24図1～3）

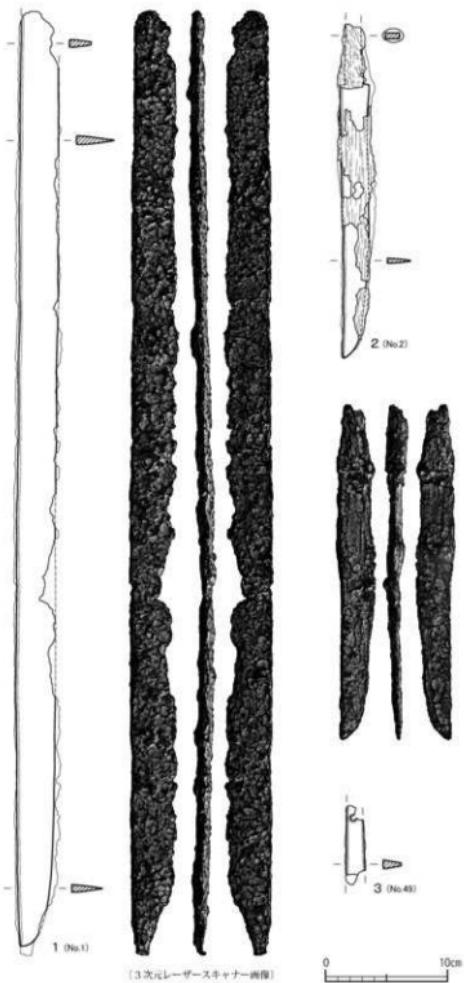
大刀は1点（第24図1）が、埋葬施設から盗掘坑斜面に投げ出され、床面から浮いた状態で発見された。検出状況から、盗掘の際に放置されたものと推測される。装具は全く見つかっておらず、鉄製の大刀身のみが出土している。刀身は直刀で、刀身部のみが残されていた。切先はフクラの張りがあり目立たず、緩やかに弧を描く。欠損により、関や茎尻の形状は不明である。残存長は76.8cmを測るが、欠損する茎部の長さを考慮すると、本来の全長は90.0cm以上に達するものと考えられる。

小刀は2点（第24図2・3）が出土した。2は切先を閉塞部方向に向けた状態で、埋葬施設の長軸ラインよりもや右側から検出された。刀身は直刀で、茎尻の一部を欠損する。関は直角両開で、茎部の断面形状は長方形である。刀身部と茎部には、それぞれ鞘および柄の木質やその痕跡が遺存していたが、木目の形状に差異が認められることから、鞘と柄では異なる木材が使用されていたものと思われる。

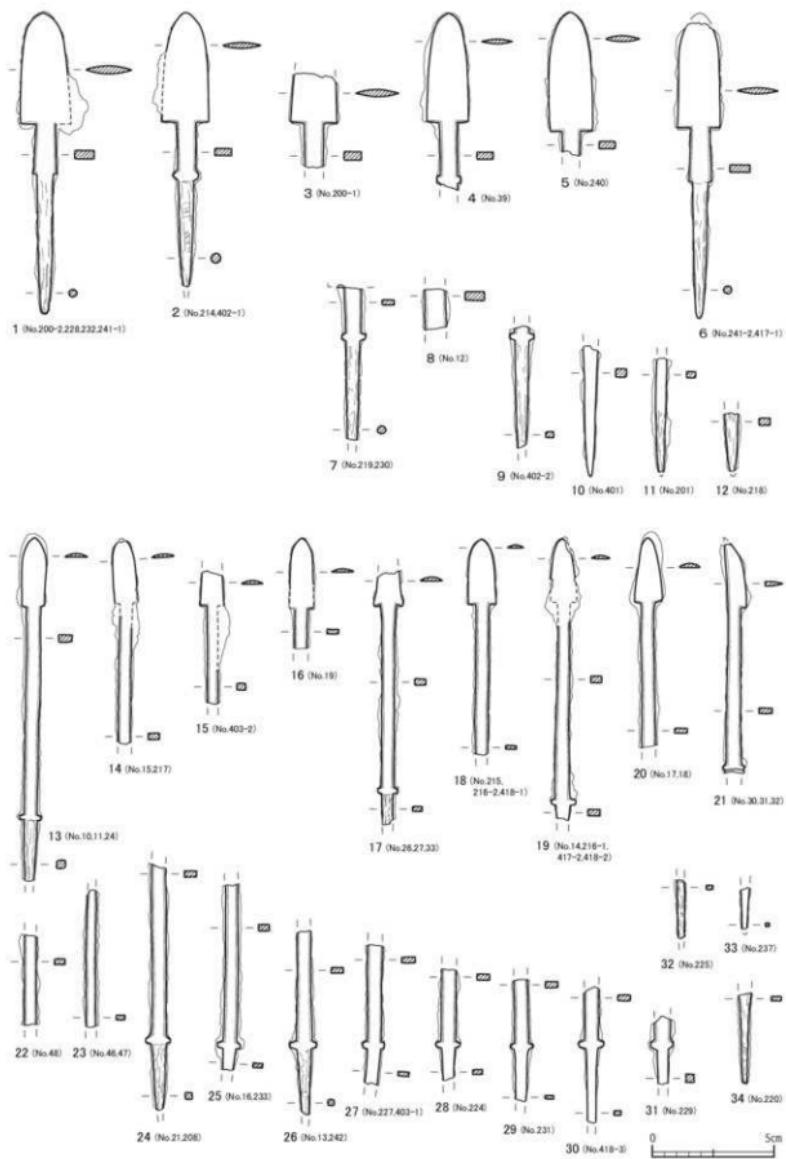
3は茎部のみが検出された。茎尻へ向かってやや先細り、厚さを減じていく。断面形状は刃部側が狭い長台形を呈し、径4.5mmの目釘孔が穿たれている。

鉄鎌（第25図1～34）

埋葬施設中央よりやや奥側寄りの、石材が抜き取られた部分を中心に検出された。接合作業によって絞り込まれた34点の形態分類を進めた結果、平根式鎌に分類されると考えられるものが12点、尖根式鎌に分類されると考えられるものが22点認められた。そのうち鎌身部が確認できるものは、平根式鎌で7点、尖根式鎌で9点である。ただし平根式鎌については、頸部や茎部のみの出土に留まったものを考慮に入れると、副葬本数はそれより増える可能性が高い。また尖根式鎌について



第24図 大刀・小刀実測図



第25図 鉄鎌実測図

は、茎間の遺存するものが12点確認できたことから、少なくとも12本が副葬されていたといえる。従って、出土した34点の鉄鎌から推測される副葬本数は、約20本と考えられる。なお、本報告書内で用いる鉄鎌の名称や分類、編年については、大谷宏治の整理（大谷2003）を基準とする。

【平根式鎌】（第25図1～12）

第25図1～12は平根式鎌に分類されるもので、副葬されていた本数は7本以上と推測される。鎌身部の形態が確認できるものについては、わずかな細部の違いは見られるものの、すべて長三角形式であった。茎間の状況が確認できるものについては、台形間と棘間が認められる。また茎部分を観察すると、矢柄の木質じたいは遺存していないものの、多くの資料で木質の痕跡（縦方向の筋）が残されていた。鎌身部から茎部まで残存するものは3点に留まり、ほぼ完形の1は全長12.4cmを測る。

鎌身部が確認できるのは、1～7の7点である。そのうち鎌身部形態の明白な1～6は、長三角形式に分類されるもので、断面形状は両丸造、鎌身間は直角間であった。鎌身部の長さはほぼ同程度であるが、1・2に比べると3～6は全体的にやや細身といえる。また、1～3は鎌身先端部から鎌身間に向かってハの字状に開きながら垂下するが、1・2がわずかに弧を描くに対し、3は直線的である。4～6は間に近づくにつれてほぼ垂直に垂下し、1～3ほどハの字状に広がらない。

茎間については、1・6が台形間、2・4・7・9が棘間となっており、2種類の間形態が確認できた。台形間は約1.5mm、棘間は約2.0mm程度、頸部から突出する。

【尖根式鎌】（第25図13～34）

第25図13～34は尖根式鎌に分類されるもので、副葬されていた本数は少なくとも12本と推測される。そのうち鎌身部が確認できるのは、13～21の9点である。これらを鎌身部の形態によって分類すると、柳葉式が4点と最も多く、長三角形式が3点、脇抜柳葉式と片刃箭式が各1点であった。

茎間の状況が確認できるものについてはすべて棘間で、頸部から約1.5～2.5mm程度、突出する。また茎部分を観察すると、平根式鎌と同様に矢柄の木質じたいは遺存していないものの、多くの資料で木質の痕跡（縦方向の筋）が残されていた。完形のものが無いくことから全長は不明であるが、最も遺存状態の良い13で14.1cmを測る。頸部長は各個体でややばらつきが見られるが、鎌身部長はほぼ同程度にそろっている。

柳葉式（第25図13～16）

鎌身先端部から鎌身間にかけてほぼ直線的に垂下するもので、鎌身部の断面形状は片丸造、鎌身間は直角間である。第25図13は出土した尖根式鎌のなかで最も遺存状態が良く、茎部の末端を欠損するものの、ほぼ全体の形状が確認できた。他の3点に比べ、鎌身部のフクラの張りがやや目立つ。

脇抜柳葉式（第25図17）

柳葉形を呈するが短い逆刺を付すもので、鎌身部の断面形状は片丸造である。逆刺は1.0mm程度と非常に短く、鎌身上半部と茎末端部を欠損する。

長三角形式（第25図18～20）

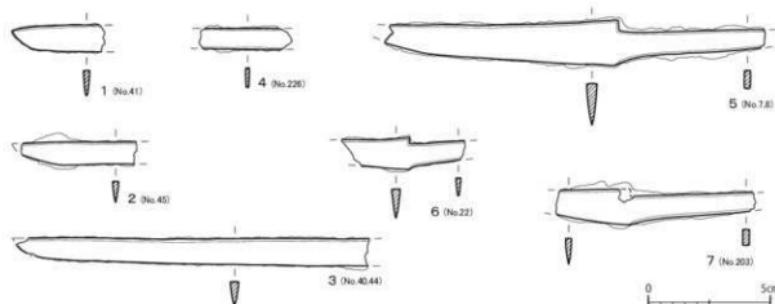
鎌身先端部から鎌身間に向かってハの字状に垂下するもので、鎌身部の断面形状は片丸造、鎌身間は直角間である。第25図19の鎌身間付近は小疊が付着し、形状の把握が困難であった。

片刃箭式（第25図21）

刀子状に鎌身部の片側のみに刃部が形成されるもので、鎌身部の断面形状は平（片刃）造、鎌身間は直角間である。鎌身先端部から鎌身間にかけて丁寧に刃部を砥ぎ出している。頸部長は他形態のものに比べるとやや短く、茎間部分には矢柄の固定に使用されたと思われる籠竹の痕跡が認められた。

【位置付け】

平根式鎌は長三角形式で占められており、全長や各部位の測量値を比較するかぎり、大きな個体差も



第26図 刀子実測図

ないと考えられる。静岡県内において平根式鍔に長三角形式の出現が確認されるのは、陶邑編年 MT15 型式期ごろからであり、さらに棘闇が一般的に出現するのは TK43 型式期である（大谷 2003）。松長 6 号墳の平根式鍔は同一形態で占められる点に特徴があり、台形闇と棘闇が併存することから TK43 型式期に近い要素がうかがえる。

尖根式鍔は出土数の最も多い柳葉式を筆頭に、脛抉柳葉式・長三角形式・片刃箭式と複数の形態が確認された。これらのうち片刃箭式を除く形態は、静岡県内において MT15 型式期ごろから尖根式鍔の主要形態となり、片刃箭式は TK43 型式期からの副葬が目立つ。確認される茎闇形態がすべて棘闇であることも併せて、平根式鍔と同様に TK43 型式期に近い要素がうかがえる。

このように松長 6 号墳の鉄鍔は、“同形態少量副葬の平根式鍔+複数形態多量副葬の尖根式鍔”で構成されている。また、推測される副葬本数が約 20 本に達する点も、被葬者像を想定するうえで重要な要素と成ろう。出土した形態を見ると、静岡県内で MT15 ~ TK209 型式期（6世紀前葉～末葉）とされる古墳から出土する鉄鍔の主要組成に類似している。さらに茎闇の特徴を考慮すると、時期としては TK43 型式期前後に求められるであろう。

刀子（第26図1~7）

刀子は 7 点が出土した。切先や、闇から莖部にかけての破片が検出されており、副葬されていた点数は 3 ~ 4 点と考えられる。第 26 図 1 ~ 3 は刃部の一部で、1・2 は切先のみが残存する。3 点とも、刃と棟がほぼ平行しながら切先に向かって直線的に伸び、切先以外は幅 1.0cm 前後を保つ。細長い刃部が特に明瞭な 3 は、残存する刃部だけで 14.5cm に達する。4 はどの部位か明確でないが、おそらく莖部の一部であろう。

5 ~ 7 は刃部の一部から莖部が残存する。3 点ともに刃部側は撫闇、棟側は直角闇で、莖部は莖尻に向かいいや先細っていく。5 は切先と莖尻を欠損するものの比較的の残存状態がよく、切先に向かって幅を減じながら、刃が棟側方向へ弧状に伸びる。7 もやや幅広の闇部分や刃が内湾する様子から、5 と類似した形態をとるものと考えられる。6 はやや幅の狭い闇や刃部の形状から、1 ~ 3 のような形態の刃部が推定される。

このように出土した刀子は、棟と刃がほぼ平行した長く細身の刃部を付すものと、刃が緩やかな弧を描き、莖部に比べてそれほど刃部が長くならないものとに分けられるようである。

第4表 大刀・小刀観察表

図版No.	種別No.	遺物No.	部位	関形状	全長(cm)	刀身部			茎部			備考
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	
第24図1	大刀	1	刀身部		(76.8)	(76.8)	3.6	0.8				直刀
第24図2	小刀	2	刀身部～茎部	直角開闊	(27.4)	22.5	2.5	0.5	(4.9)	1.6	0.5	直刀。茎尻欠損。鈴・病の木質感が残る
第24図3	小刀	49	茎部		(6.5)				(6.5)	1.6	0.8	径4.5mmの目釘孔あり

()は残存値または推定値を表す

第4表 鉄鎌観察表

図版No.	遺物No.	部位	鎌身形状	鎌身断面	茎闊形状	全長(cm)	鎌身部			頭部			備考	
							長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
第25図1	200-2-228・232・241-1	鎌身部～茎部	平根長三角形式	圓丸造	台形闊	12.4	4.6	(2.1)	0.4	2.1	1.0	0.4	5.7 0.7 0.3 病の木質感が残る	
第25図2	214-402-1	鎌身部～茎部	平根長三角形式	圓丸造	鍔闊	(11.3)	4.6	2.0	0.3	2.4	0.8	0.3	(4.3) 0.7 0.4 病の木質感が残る	
第25図3	200-1	鎌身部～頭部	平根長三角形式	圓丸造		(3.9)	(2.1)	1.9	0.3	(1.8)	0.8	0.4		
第25図4	39	鎌身部～茎部	平根長三角形式	圓丸造	鍔闊	(7.3)	4.5	1.7	0.2	(2.1)	0.8	0.3	(0.1) 0.7	
第25図5	240	鎌身部～頭部	平根長三角形式	圓丸造		(5.9)	4.9	1.9	0.3	(1.0)	0.8	0.4		
第25図6	241-2-417-1	鎌身部～茎部	平根長三角形式	圓丸造	台形闊	(12.1)	(4.3)	1.8	0.3	2.2	0.9	0.3	5.6 0.7 0.3 病の木質感が残る	
第25図7	219・230	鎌身部～茎部	平根式		鍔闊	(6.3)				2.2	0.7	0.3	(4.1) 0.6 0.3 病の木質感が残る	
第25図8	12	頭部	平根式			(1.7)				(1.7)	0.8	0.4		
第25図9	402-2	頭部～茎部	平根式		鍔闊	(5.0)				(0.6)	0.7		(4.4) 0.6 0.3 病の木質感が残る	
第25図10	401	茎部	平根式			(5.4)					(5.4)	0.6	0.4	
第25図11	201	茎部	平根式			(4.7)					(4.7)	0.5	0.3 病の木質感が残る	
第25図12	218	茎部	平根式			(2.4)					(2.4)	0.6	0.3 病の木質感が残る	
第25図13	10・11・24	鎌身部～茎部	尖根短葉型	片丸造	鍔闊	(14.1)	2.9	1.1	0.2	8.7	0.6	0.3	(2.5) 0.5 0.4 病の木質感が残る	
第25図14	15・217	鎌身部～頭部	尖根短葉型	片丸造		(8.4)	(2.7)	1.0	0.2	(5.8)	0.5	0.3		
第25図15	403-2	鎌身部～頭部	尖根短葉型	片丸造		(5.5)	(1.5)	1.0	0.2	(4.0)	0.5	0.3		
第25図16	19	鎌身部～頭部	尖根短葉型	片丸造		(4.6)	(2.9)	(1.0)	0.2	(1.7)	0.5	0.2		
第25図17	26・27・33	鎌身部～茎部	尖根短葉型	片丸造	鍔闊	(10.4)	(1.5)	1.2	0.2	7.7	0.6	0.3	(1.2) 0.5 0.2 病の木質感が残る	
第25図18	215・216-2・418-1	鎌身部～頭部	尖根長三角形	片丸造		(8.9)	2.7	1.2	0.2	(6.2)	0.5	0.2		
第25図19	14+216-1・417-2+418-2	鎌身部～茎部	尖根長三角形	片丸造	鍔闊	(11.6)	(2.6)	(1.1)	0.2	8.4	0.6	0.3	(0.6) 0.6 0.3 別個体の一部が付着	
第25図20	17・18	鎌身部～頭部	尖根長三角形	片丸造		(8.6)	2.7	1.2	0.2	(5.9)	0.5	0.3		
第25図21	30・31・32	鎌身部～茎部	尖根片刃鋸式	平丸	鍔闊	(9.4)	(2.9)	0.9	0.2	6.6	0.6	0.3		
第25図22	48	頭部	尖根式			(2.6)					(2.6)	0.5	0.3	
第25図23	46・47	頭部	尖根式			(5.7)					(5.7)	0.4	0.2	
第25図24	21・206	頭部～茎部	尖根式		鍔闊	(10.1)					(7.4)	0.6	0.3 (2.7) 0.4 0.3 病の木質感が残る	
第25図25	16・233	頭部～茎部	尖根式		鍔闊	(7.6)					(6.7)	0.5	0.3 (0.9) 0.5 0.2	
第25図26	11・242	頭部～茎部	尖根式		鍔闊	(7.6)					(4.9)	0.6	0.3 (2.7) 0.5 0.3 病の木質感が残る	
第25図27	227・403-1	頭部～茎部	尖根式		鍔闊	(5.8)					(4.3)	0.6	0.3 (1.5) 0.6 0.2 別個体の一部が付着	
第25図28	224	頭部～茎部	尖根式		鍔闊	(4.6)					(3.3)	0.6	0.3 (1.3) 0.5 0.2	
第25図29	231	頭部～茎部	尖根式		鍔闊	(5.0)					(2.9)	0.7	0.3 (2.1) 0.5 0.2	
第25図30	418-3	頭部～茎部	尖根式		鍔闊	(5.6)					(2.6)	0.6	0.3 (3.0) 0.5 0.2	
第25図31	229	頭部～茎部	尖根式		鍔闊	(2.8)					(1.4)	0.7	0.3 (1.4) 0.5 0.4 別個体の一部が付着	
第25図32	225	茎部	尖根式			(2.4)						(2.4)	0.4	0.2 病の木質感が残る
第25図33	237	茎部	尖根式			(1.7)						(1.7)	0.4	0.2
第25図34	220	茎部	尖根式			(3.7)						(3.7)	0.5	0.2 病の木質感が残る

第5表 刀子観察表

図版No.	遺物No.	部位	関形状	全長(cm)	刀身部			茎部			備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	
第26図1	41	刀身部(切先)		(3.8)	(3.8)	1.1	0.3				
第26図2	45	刀身部(切先)		(4.7)	(4.7)	1.0	0.3				
第26図3	40・44	刀身部		(14.5)	(14.5)	1.1	0.4				
第26図4	226	茎部?		(3.8)				(3.8)	0.9	0.2	
第26図5	7・8	刀身部～茎部	刃闊：側闊 側闊：直角闊	(15.6)	(9.6)	1.9	0.5	(6.0)	1.0	0.3	
第26図6	22	刀身部～茎部	刃闊：側闊 側闊：直角闊	(5.1)	(2.8)	1.3	0.4	(2.3)	0.9	0.2	
第26図7	203	刀身部～茎部	刃闊：側闊 側闊：直角闊	(8.2)	(3.0)	1.5	0.3	(5.2)	0.9	0.3	

(3) その他の遺物

①弥生時代の遺物

大型蛤刃石斧（第27図1）

調査区南西隅の擾乱層から、完形の状態で出土した磨製石斧である。いわゆる大型蛤刃石斧と呼ばれる形状のもので、砂岩を石材とする。表裏面および側面が縱方向に研磨され、断面は楔円形状を呈する。側面と裏面を中心には、敲打痕が認められた。

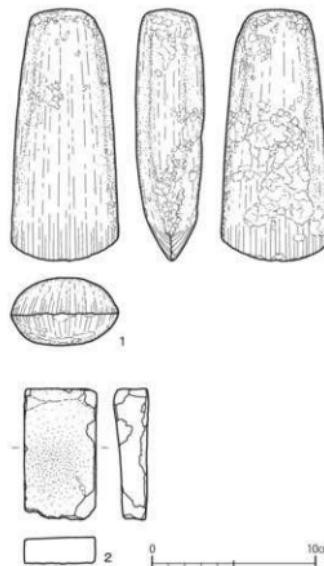
砥石（第27図2）

表土内から見つかった、やや軟質な砂岩製の砥石である。欠損部が認められるものの、長方形形状を呈し、表面と側面が砥面として使用されている。

②古墳時代以降の遺物

銅鏡（第28図1・2）

中国からの輸入鏡である「至道元寶」と「永樂通寶」が、表土内から見つかった。第28図1は「至道元寶」で、995年を初鋲年とする北宋鏡である。2は「永樂通寶」で、1403年を初鋲年とする明鏡である。



第27図 弥生時代石器実測図

第6表 弥生時代石器観察表

図版No.	器種	石材	層位	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
第27図1	大型蛤刃石斧	砂岩	表土	15.4	6.6	4.2	710.6
第27図2	砥石	砂岩	表土	8.0	4.4	1.6	118.3

第7表 銅鏡観察表

図版No.	出土地点	銘名	書体	国名	初鋲年	鍛造年	内径(cm)	外径(cm)	重量(g)
第28図1	表土	至道元寶	草書	宋(北宋)	995年	2.4	1.7	0.7	31
第28図2	表土	永樂通寶	真書	明	1403年	2.4	2.1	0.7	22



第28図 銅鏡実測図 (PEAKIT)

【3】用・参考文献

- 内山義行 2013 「全國製品の型式学的研究 馬具」『古墳時代の考古学4 創作物の型式と編年』同成社
- 大谷弘治 2003 「墳崎区分、時代区分と地圖分類」『静岡県埋蔵文化財調査研究会研究紀要』第10号
- 大谷宏治 2003 「道山・鶴ヶ原、伊豆における古墳時代後期の鉄器の変遷とその意義」『静岡県埋蔵文化財調査研究会研究紀要』第10号
- 小幡早苗・近藤美紀 2001 「横穴式石室用鏡の定義」『第8回東海考古学フォーラム三河大会 東海の後隔古墳を考える』三河古墳研究会
- 菊池浩作 2008 「鏡中反映出る無輪石鏡」『静岡県考古学会2007年度シンポジウム』静岡に伝う横穴式石室・鶴ヶ原式石室を中心にして
- 柴林誠助 2004 「馬具の生產と地圖分類―馬具分布把握、静岡県馬具からの中絞計―」『践踏文化多角的研究 践踏文化研究集会第10回記念大会』践踏文化研究会
- 坂本英夫 1985 「考古学ライブリー34 馬具」ニューサイエンス社
- 鈴木一有 2002 「絆ヶ崎1号墳の再検討」『江戸考古』第15号
- 鈴木一有 2006 「馬具の分類」『東海の馬具と動く力』東海考古文化研究会
- 中村和則 2010 「古墳時代後期のイモガラ(猿馬)に関する基礎的研究」『芸術2003-3号地下式横穴墓出土例をもとに』『先史学・考古学論叢V-甲元良之先生追憶記念-下巻』
- 橋本正之 2013 「機質と製品の型式の研究」『古墳時代の考古学4 創作物の型式と編年』同成社
- 花谷 浩 1983 「馬具」「湯舟鏡2号墳」久美浜町教育委員会
- 羽代栄一 1989 「「ゆるめる貝製鏡について」『讀行史学』第26号
- 宮代栄一 2010 「「ゆるめる貝製鏡について」『讀行史学』第26号
- 山本博三 1995 「静岡県下の6~7世紀の土師器・鶴ヶ原部・伊豆北部の現状について」『東海考古研究』第4号
- 静岡法人静岡県埋蔵文化財調査研究会 2008 「部分分類」『静岡県埋蔵文化財調査研究会調査報告第184集』

第IV章 松長古墳群の分布調査

第1節 千本砂礫州上の古墳

本報告書で報告した松長6号墳は、周知の古墳群である松長古墳群に属している。松長古墳群の立地する千本砂礫州上では、富士市域を含めて複数の古墳が確認されているが、砂礫州上に形成された集落の規模に比べてその数は非常に少なく、また分布域も偏りが見られる。沼津市域ではこれまで、古墳時代前期の前方後円墳である神明塚古墳と、後期の群集墳である松長古墳群のみが明確な古墳として認知されてきたが、これらはいずれも松長地域に属している。このような分布の偏りは、松長地域以外において組織的な分布調査が行われていないことが大きく影響していると考えられ、砂礫州上には未知の古墳が少なからず存在していると思われる。また松長古墳群についても、破壊されてしまったものや、削平により姿がほとんど確認できなくなっているものが多く、これまで示されてきた古墳群の範囲は、古くに行われた踏査の記録や資料などに頼るところが大きい。

そこで今回、松長古墳群に属する古墳の本格的な発掘調査が行われたのを機に、松長古墳群を構成すると考えられる古墳の分布状況を把握することをおもな目的として、踏査による分布調査を行った。そして、新しく発見された古墳について遺跡の新規登録を行うとともに、調査結果を基に松長古墳群の分布範囲を再検討して、古墳群の規模を修正した（本報告書内に示されている松長古墳群の範囲は、すべてこの分布調査により再確定した範囲である）。

第2節 分布調査

(1) 調査方法と調査経過

分布調査は平成25年11月15日～12月27日にかけて行われ、池谷・原田に調査補助員4名を加えた計6名が調査を担当した。調査対象とした地域は西間門から植田に至るまでの東西約10kmに及ぶ範囲である。1日におよそ東西1km、南北200mの範囲において現地を踏査し、古墳の可能性がある微高地形の観察と遺物分布状況の観察を行った。特に、祠が建つところでは微地形、畠地では遺物の散布を注視し、古墳の可能性が高い地点と遺物の散布地ではその位置を記録して対象地の写真を撮影し、遺物を採取した。現地調査の合間に、採取した遺物の洗浄や記録したデータの整理を行い、東海道の絵地図や地籍など、多方面の資料と併せて検討することで、最終的に古墳かどうかの判断を行った。

(2) 調査結果および古墳群の構成

調査の結果、小瀬訪から大塚地域にかけて古墳14基（新規の遺跡として登録）と、古墳と断定はできないものの古墳の可能性が高い地点を8か所、確認した。古墳14基のうち11基は、分布状況により松長古墳群を構成する古墳と認定し、今沢の三島神社付近を西端、小瀬訪の西通付近を東端とする東西約1.8kmの範囲、海沿いの県道付近を南端、東海道本線付近を北端とする南北約400mの範囲を松長古墳群の分布範囲と捉え、古墳群の範囲を大きく変更した。

ところで松長古墳群は、昭和12年8月に小野真一が行った踏査時に、14基の円墳が発見されたことでその存在が認められた。その当時から、古墳の多くは破壊されたり削平されたりして満足に形状を留めていないものも多く、小野は「土地の住民も殆んど塚或いは古墳としての概念は有して居らず、一部にはきつね山、たぬき山等称して子供の遊び場にさえなっていた」と記している（小野 1957）。

また、平成3年の6月～9月にかけては、看護学校の西隣りで工場建設に伴う発掘調査が行われ、調査対象地内で発見された4基（1号墳～4号墳）と、南側の県道部分で発見された1基（5号墳）を合わせた5基の円墳が確認されている。これらの円墳は径5m前後、大きいもので径8mほどを測り、



第29図 松長古墳群分布調査結果

第8表 松長古墳群分布調査結果一覧表（確実な古墳のみ）

調査番号	所在地	土地現状	墳丘形状・規模	採取遺物	概要
11-18-01	松長字南屋敷 69-1、大瀬防字 叶 57・58	雜種地 (原木・ 果樹園・畑)	円墳 直径約 10m 高さ 0.5m(残存値)	須恵器片 1点	東海ふそうの北側に隣接する畠地と住宅地の間で、盛土が確認された。墳丘は所々削平されているため形状は不整形である。南側では、東海ふそうの建設に伴う調査時に、円墳 5 基が検出されている（1～5号墳）。
11-18-07	松長字北屋敷 212	福荷社境内 (借家地角地)	円墳 直径約 5m 高さ 0.5m(残存値)	古銭	旧東海道の北側、神明塚古墳の南東部に位置する。辻の角地で、わずかな盛土の上に福荷の小祠が祀られている。幕末期の古銭が採取されたことから、この福荷は江戸時代から存在したものと考えられる。
11-19-03	松長字北屋敷 252	福荷社境内	円墳 直径約 4m 高さ 0.3m(残存値)		旧東海道の北側、6号墳の北西部に位置する。東西に伸びる通りに面し、わずかな墳丘が確認された。場内の裏には福荷の小祠が祀られている。
11-21-20	大瀬防字 家地質 388	福荷社境内 (高木樹木)	円墳 直径約 10m(復元値) 高さ 1m(残存値)	須恵器片 2点 土師器片 6点	旧東海道の北側、片浜小学校の北東際に位置する。東西の小道に面し、南北は畑、南側は車道に削平されているものの、東西方向には比較的良好に墳丘を残す。墳丘上には福荷の小祠が祀られ、南無馬頭観音の碑が建つ。
11-21-30	大瀬防字河原 419-1	福荷祠 敷地内	円墳		旧東海道の北側、住宅地のなかに位置する。南北の小道がわざかに折れる地点で、3m四方の狭い敷地に祠が祀られている。傾斜地であるため、北側の住宅地とは 0.5m 近い段差が生じており、墳丘のように見える。
11-21-33	大瀬防字 北道並 280-1・2	宅地 空き地	円墳 直径約 3m 高さ 0.5m(残存値)		旧東海道の北側、片浜小学校の北東際に位置する。東西の小道に面し、南北は畑、南側は車道に削平されているものの、東西方向には良好な墳丘が残されている。
11-25-06	小瀬防字西通 357～359	秋葉神社 境内	円墳 直径約 15m 高さ 1.5m(残存値)	土師器片 5点	旧東海道の北側、住宅地のなかにある秋葉神社の境内に位置する。北側を宅地に削平されているが、東西方向には良好な墳丘が残存していた。墳丘上には秋葉神社が祀られている。
11-25-07	小瀬防字西通 346	福荷社境内	円墳 直径約 5m 高さ 1m(残存値)		旧東海道の北側、片浜小学校の北東際に位置する。周囲を宅地に囲まれた閑地で墳丘が確認され、墳丘上には福荷が祀られている。
11-25-08	小瀬防字西通 362-2	福荷神社 境内	円墳 直径約 5m(復元値) 高さ 0.5m(残存値)		旧東海道の北側、小道を折れ曲がる地帯でわずかな盛土が確認された。残存状況が悪く、墳丘はほとんど残っていない。社を迂回するように小道が回っていることから、社は古くからあるものと推定される。
11-25-09	大瀬防字河原 424-1	福荷社 (丹後福荷大 明神) 境内	円墳 直径約 5m(復元値) 高さ 0.5m(残存値)		旧東海道の北側、小道のランク付近でわずかな盛土が認められた。残存状況が悪く、墳丘はほとんど残っていない。福荷の小祠が祀られている。
12-05-07	今沢字往還添 213-1・2	三島神社 境内	円墳 直径 10m(以上)(復元値) 高さ約 2m(残存値)		旧東海道の北側、松長古墳群分布範囲の西端に位置する。神社の境内は東海道本線跡まで及び、神社本殿の後方に盛土の中心がある。境内には樹齢 400 年以上に及ぶ雄の高木が鎮座している。

幅 1 m 前後の浅い周溝を有している。1号墳では主体部で粘土構造の痕跡が見つかり、3号墳では本報告の 6 号墳と類似する、径 20 ~ 30cm の扁平な海浜礫を用いた礫床が検出された。遺物としては須恵器が数点出土しており、その年代から、これら古墳の構築は 6 世紀前葉～中葉に始まり、6 世紀代の内に納まるものと報告されている（鈴木ほか 1992）。

以上のように、松長古墳群は開発が進んだ海岸沿いの地域に分布していることから、愛鷹山麓に形成された古墳群に比べて古墳の残存状況が悪く、古墳群の全容を解明することは困難な状況にあると言わざるを得ない。こうした背景のなか、今回の調査では古墳群の現状を把握し、長年不明瞭であった古墳群の範囲をある程度、明確にすることができた。松長古墳群の範囲内では、鳥居が建ち、小さな祠の祀られている場所が高い頻度で見受けられる。これらの下は古墳の墳丘となっている場合が多くあり、今回の分布調査でもほとんどの古墳が同様の状況で見つかった。盛土や遺物などがまったく確認できず確実な古墳として認められなかった地点も多かったが、これら多数の鳥居や祠は本来の松長古墳群の分布密度を想像させるものである。

【引用・参考文献】

- 小野哲一 1957 「静岡県東部古代文化地図」 蘭英社書店
鈴木哲風・仲家三千彦・前田友子 1992 「沼津市文化財調査事業の概要」 沼津市教育委員会

第V章 調査成果

1. 松長6号墳の立地環境

松長6号墳は海岸線から北に約350m、標高8m前後の千本砂礫州上に立地する。駿河湾沿いに続く千本砂礫州は、その大半が海成砂礫で構成されており、現在はその上を飛砂が覆って砂丘を形成している。本古墳はわずかに土を含んだ小砂利層上に構築され、盛土に使用された土層にも多くの小礫が混在していた。従って、古墳構築層、盛土とともに締まりが弱く、崩れやすいという特徴を有している。また周辺には、愛鷹山麓に構築された古墳群のように大形の石材を多量に確保できる環境は見受けられず、埋葬施設を構成する石材の入手には相当の困難を伴ったものと思われる。今回の調査で明らかとなつた埋葬施設の特殊な構造は、構築の際にこうした周辺環境による制限が影響したことを示していよう。

2. 市内の古墳分布と千本砂礫州上の古墳

沼津市域における古墳構築の変遷を見ると、古墳時代初頭から後期前半までは前方後円墳や前方後方墳の造営、それ以降は群集墳の爆発的な増加という大きな流れが理解される。大形古墳としては、築造年代が3世紀中頃と推定される高尾山古墳（前方後方墳）を筆頭に、神明塚古墳・長塚古墳・子ノ神古墳（いずれも前方後円墳）が発見されている。群集墳の多くは愛鷹山麓の尾根上に集中し、全国でも有数の群集墳分布地帯を形成する。

松長6号墳の立地する千本砂礫州上は、後期を中心に多数の集落が確認されており、沼津市域の古墳時代を代表する居住地域である。しかしその居住規模に比べ、これまでに発見されている古墳の数は非常に少ない。これは、組織的な分布調査が行われていないことや、住居や工場の建設に伴い破壊されてしまった古墳が多いことに起因するが、上述したように、砂礫州という環境が古墳の築造に必ずしも適しているとはいえないことも要因の一つであろう。

砂礫州上に築造された古墳としては、前期中葉（4世紀前半）との見解が示されている神明塚古墳が初現となる。松長6号墳から600mほど北西に位置する全長53mの前方後円墳で、砂礫州上の古墳においては最大規模を誇る。神明塚古墳以降は古墳の築造が確認されない時期が続き、後期前葉（6世紀前葉）になって富士市域に山の神古墳（全長41.5m、前方後円墳）が築造される。後期後半（6世紀末）以降は、沼津市域で松長古墳群や大塚古墳群、富士市域でも数か所に古墳群が形成されるほか、小規模な円墳が点在する状況が看取される。

3. 古墳の構造と築造・埋葬過程の復元

【墳丘の規模と形状】 今回の調査では墳丘端や外部施設が確認されず、正確な墳丘長を把握することはできなかった。ただし、墳丘の傾斜は調査区の外側へ続いているため、15mを超えることは間違いないといえる。さらに、平成16年度の試掘調査時に検出された周溝と思われる溝の位置から考えると、墳丘長は20m前後に達する可能性が高いであろう。しかし盛土の大半は削平され、木根による攪乱や盜掘による破壊の影響も大きいことから、墳丘の形状はかなり改変されているものと思われ、墳頂部までの高さは不明である。

【埋葬施設の規模と構造】 埋葬施設では石材の多くが失われ、本来の姿をほとんど留めていなかった。従って詳細な構造や規模は不明であるが、残存部分の構造を観察した結果、多様な要素が混在した独自色の強い埋葬施設を構築していることが明らかとなった。

検出された埋葬施設は全長8m、最大幅3.2mを測り、主軸を東西方向に向ける。地山を浅く掘り込んだ掘り方は、横穴式石室の玄室、羨道に類似した形状を呈しており、玄室に相当する部分には掘り方

に沿って、長さ 50cm 前後、厚さ 20cm に満たない程度の石材が設置されている。床面は 2 面が確認され、海浜礫を用いた敷石が施されていた。それぞれ初葬時と追葬時に伴うものと考えられ、初葬時に設置された床面 1 は異なる大きさの礫を用いた 2 層の礫床を組み合わせ、2 層の間に褐色土を含んだ小砂利層を挟むことで、礫を固定している。玄室に相当する部分の入口付近では、墓室空間への出入口を閉塞したと考えられる海浜礫の積石が検出された。

これら埋葬施設の観察結果から、まずは横穴系埋葬施設の要素を読み取ることができる。それは、墓室空間の小口部分へ羨道に相当するような空間（または墓道、横口的な構造）を付す点や、入口付近で墓室空間を閉塞するような行為が認められる点、追葬が行われている点に表れている。なお、羨道に相当するとした部分については、玄室に相当する部分との境界に明瞭な仕切り等が設けられておらず天井構造も不明であることから、羨道部空間としての意識は未発達といえる。埋葬時の出入りに使用される通路としての機能に重点が置かれ、追葬時には横口が設けられた可能性が考えられよう。一方で、単純に横穴式石室と分類するには、受け入れ難い要素も存在する。

石材として使用されるディサイト製の亜角礫は、愛鷹山麓源流部のものに比べると薄く華奢で、積み上げるにはやや安定性を欠く形状である。また石材の据えられた掘り方は、墓坑と呼ぶにはあまりにも浅く、地山も崩れやすい。このような条件のなかで側壁を積み上げ、天井石を架構することは可能であろうか。そこで改めて石材の検出状況を見ると、石室というよりむしろ竪穴系埋葬施設に見られる“礫櫛”に類似性を見出すことができる。もし、礫櫛状の施設が構築されていたとするならば、積石は安置された棺を固定する程度の高さに留まり、天井部は土で覆っただけの簡易な構造であった可能性も想定される。

以上の観察結果をまとめると、羨道部とするには未発達であるが、外部から墓室空間への出入りを可能にする墓道または横口的な役割を持った施設を付属し、追葬を行う点に、横穴系埋葬施設に関する情報の移入が認められる一方、石材を用いた施設の構造が、石室というより礫櫛に近い形態をとる点には、伝統的な竪穴系埋葬施設の意識が引き継がれていると考えられる。

【建築・埋葬過程の復元】 このような特殊な構造を採用していることを踏まえ、古墳の築造、埋葬過程について若干の復元を試みる。まず、埋葬施設範囲の目安となる程度に地山を浅く掘り込み、棺を安置する分の幅を残して、玄室に相当する空間の左右に基底石を設置する。その際、石材は掘り込みに沿って 2 列に並べ、小口面を内側に向けてそろえる。次に、残された掘り込みに埋土を敷き、海浜礫や小礫を敷き詰めて床面 1 を整える。この段階で棺を搬入したと仮定するのが最も自然に思われるが、その搬入方法は明確でない。床面が周囲の地山とほぼ同じ高さであるため、小口側からスライドさせて搬入した可能性や、竪穴系埋葬施設のように上から搬入した可能性も考えられる。棺の安置後は、棺に沿って左右の石材を積み上げて固定し、盛土（4 層）を行う。その際、奥側の張り出し部分には盛土を水平に敷き詰め、その上に石材を据えて奥側を閉塞する。さらには、墓室空間の出入口の閉塞や、墳丘の構築が行われるものと考えられるが、確実な作業工程や天井部の構造などは不明である。

4. 横穴系埋葬施設の伝播と松長 6 号墳への影響

東海地方に横穴系埋葬施設（主として横穴式石室）が受容されるのは、5 世紀後葉頃（陶邑編年 TK23～TK47 型式期）であり、各地域で本格的な導入が開始されるのは 6 世紀前葉頃（MT15～TK10 型式期）とされる（鈴木 2001）。静岡県内における初現は 6 世紀前葉頃と考えられ、6 世紀後半～7 世紀前半（TK43～TK217 型式期）にかけて一般的な埋葬施設として爆発的に普及する。

横穴式石室が中小規模古墳の埋葬施設として定型化する以前は、東海地方の各地域で多岐に渡る独自性の強い横穴系埋葬施設が築造されているが、それは移入された様々な情報が整理されずに各自の基量

で取り入れられた結果であると考えられる。従って、松長6号墳の源流を特定の地域や系統に求めるることはできない。この時期の横穴系埋葬施設には、畿内や北部九州、朝鮮半島からの影響が強く反映された畿内系石室や竪穴系横口式石室などが存在し、特に竪穴系横口式石室における未発達の渢道部（横口的な構造）は、松長6号墳にも見られる要素である。

これまで、松長6号墳の属する東駿河地域（富士川右岸から箱根山麓北部）に横穴式石室が導入されたのは、他地域から少し遅れたTK43型式期前後とされてきた。その初現にあたる富士市の中原4号墳では、明確に横穴式石室と呼べる埋葬施設が構築されており、横穴系埋葬施設に関する情報の整理、解釈が進んでいる。対して松長6号墳の埋葬施設は、東駿河地域よりわずかに先行して横穴式石室が導入された遠江地域で多く認められるような、導入期の複雑な埋葬施設の様相を示している。

5. 副葬遺物の系譜と位置付け

古墳に副葬されたと考えられる遺物は、土器と金属製品を主体としており、金属製品は種類、数量ともに豊富であった。特に、全国的にも希少な形態の金銅装轡と辻金具を有した馬具は、本古墳の特異な性格を象徴するものといえる。検出された副葬遺物の種類および点数をまとめると、土器は土師器模倣壺1点と破片7点が出土し、馬具は金銅装内湾口円形鏡板付轡1式、金銅装辻金具6点（3～4個体分）、飾金具5点、鉄具3点（おそらく同一個体）、武器類は鉄製大刀1点、小刀2点、鐵鎌34点（副葬數は20本前後）、工具類は刀子7点（3～4個体分）となる。

【土 器】閉塞部の手前から出土した土師器模倣壺は、「内湾口縁環」と呼ばれる模倣壺に類似している。これは山本編年（山本 1995）の环 B 3類に当たるものであるが、本古墳出土の模倣壺は縮小化が認められ、造りも粗雑であることから、編年的位置は7世紀前半代に求められるであろう。従って、他の副葬遺物とは時期に大きな開きが認められる。また、大きく2つに破碎した状態で検出されていることから、追葬の際、閉塞儀礼に類似する行為が行われ、それに伴って使用された可能性も考えられる。

内湾口縁環は山梨県や静岡県東部地域独自の形式として定着し、その分布は神奈川県西部（相模）や多摩川下流域、長野県松本盆地に及ぶ。古墳からの出土は少ないとされ、松長6号墳の周辺では同じ千本砂礫州上に立地する東畠毛遺跡、烏沢遺跡、下道遺跡といった集落で出土が確認されている。追葬時に伴うと考えられる遺物はこの模倣壺1点しか確認できなかったが、横穴式石室が一般的な埋葬施設として定着し、多くの群集墳が形成されていた7世紀前半ごろに、在地性の非常に強い土器を伴った追葬を行っていたことが明らかとなった。

また、副葬土器と断言できる須恵器が全く認められなかった点も注目すべきである。6号墳より時期が降ると考えられる1～3号墳から、主要な副葬品として須恵器が出土している点を踏まえると、盗掘時に持ち出された可能性とともに、この地方で須恵器による祭祀や副葬が本格化する以前に古墳が築造された可能性も想定されよう。

【馬 具】今回、検出された馬具は、面繁との関連性が強いものと思われる。轡以外の装具は尻繁にも使用されるものであるが、辻金具に見られるようなイモガイ装の馬具に対しては、面繁を中心に構成されていた可能性が示されている（宮代 1996）。従って出土した馬具一式は、馬を制御するために最も重要な装具である轡と、それを固定する面繁に取り付けられた装具で構成されていたと考えられる。

轡は金銅装の内湾口円形鏡板に2連式の衝を通し、衝先環に鏡板の内側で引手を連結して先端に別造りの瓢形引手壺を取り付けるとともに、面繁連結装置として兵庫鎖を用いたものであった。馬へ装着する際は、兵庫鎖先端の吊金具に面繁、引手壺に手綱を繋ぎ、辻金具を介して連結した面繁に、飾金具や鉄具が取り付けられたのである。これら出土馬具において、古墳被葬者の性格や階層性を推測するうえで大きな意味を持つものとして、金銅装内湾口円形鏡板付轡と辻金具の存在が挙げられる。

一金銅装内湾楕円形鏡板付轡一

内湾楕円形鏡板付轡はほぼ共通した分類や変遷觀が示されており、鈴木一有によってさらに詳しい検討が行われている（鈴木 2002）。そこで、これらの研究成果に基づきながら、松長 6 号墳の位置付けを考えていきたい。

〈内湾楕円形鏡板付轡の特徴と分類・変遷〉

内湾楕円形鏡板付轡は鉄製品と金銅装製品が存在するが、日本列島内では鉄製品が圧倒的に多く出土しており、松長 6 号墳のような金銅装製品は非常に少ない。金銅装製品は、銅留の縁金を持ち（縁金系）、引手の先端に別造りの瓢形引手壺を連結する形態（瓢壺系）が一般的である。加えて、銜先環を鏡板に連結するための手法や、金銅板の被せ技法、縁金に打たれる鉢数の変化といった特徴も金銅装 F 字形鏡板付轡との類似性が強く、製作、変遷の過程における両者の密接な関係性がうかがえる。松長 6 号墳から出土した轡は、金銅装内湾楕円形鏡板付轡の一般的な形態に準ずるものであった。

内湾楕円形鏡板付轡の分類は、鏡板の形状に即して行われ、面繋連結装置による細分が示されている。鏡板は下縁の抉り部分に着目し、抉り部分の両端が緩やかなカーブを描く I 型式と、抉り部分の両端が尖る II 型式とに分類され、I 型式から II 型式への移行が認められる。また I 型式のなかでは、面繋連結装置として銅留吊金具を用いるものが古相を示し、II 型式では兵庫鎖を用いるものが多いとされる（出土事例の多い鉄製品を基本とした分類であるが、金銅装製品にもおむね当てはまるものと考えられる）。これに従えば、松長 6 号墳の形態は II 型式と捉えられ、縁金系金銅装 II 型式に分類される。

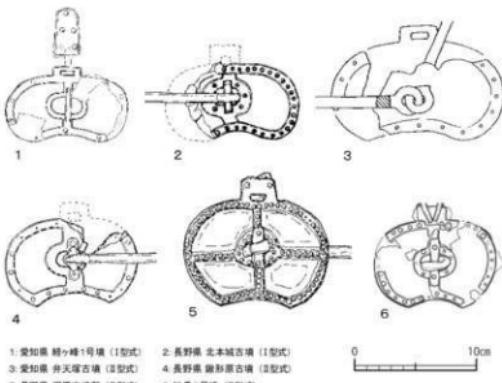
内湾楕円形鏡板付轡は古墳時代中期中葉ごろ朝鮮半島に出現し、日本列島では中期後葉（陶邑編年 TK208 型式期ごろ）から出土例が確認される。I 型式から II 型式への移行は、おむね後期初頭ごろ（MT15 型式期）で、II 型式は後期前半（TK10 型式期）のうちに衰退するとされる。従って II 型式に分類される松長 6 号墳の轡は、MT15～TK10 型式期の間に位置することになる。

〈金銅装製品出土事例との比較〉

日本列島内における金銅装製品の出土事例は非常に限られていることから、その製作地や入手ルートなどはまだ不明瞭な点が多い。朝鮮半島を含めたこれまでの出土事例では、古相とされる金銅装 I 型式は列島内の出土が極めて少なく、朝鮮半島南部の大伽耶圏に集中する傾向が指摘されている（鈴木 2002）。対して金銅装 II 型式は、

列島内の後期古墳のみで出土が確認されている。出土地域としては、兵庫県、大阪府、愛知県、長野県が挙げられるが、その数は 10 例に満たない^⑩。

そこで鈴木の示す変遷を基に出土例を見ると、著しい形態変化はないものの、鏡板の高さと幅の比率や縁金に打たれる鉢の数、引手の連結方法といった部分に変化が認められる。II 型式の例として挙げた弁天塚古墳例や鍊形原古墳例は、I 型式のように鏡板が横長で、縁を巡る鉢の数は 20 本に満たず、引手は鏡板の外側で連結される。



第 30 図 金銅装内湾楕円形鏡板付轡出土例

対して塚原古墳群例は、鏡板の高さと幅に大きな差が無く、縁を巡る鏡は66本前後に達し、引手は鏡板の内側で連結される。縁金を持つ馬具は一般的に、時代が降ると鏡の数が増加する傾向にあることや、引手の鏡板内側連結法は後期I新相に出現するとの指摘（内山2013）を考慮すれば、弁天塚古墳例・鍊形原古墳例と塚原古墳群例との前後関係は明確にできよう。そこで松長6号墳の轡を比較してみると、鏡板の高さと幅にそれほど大きな開きがなく、引手が鏡板の内側で連結される点に塚原古墳群例との類似性が認められる。ただし、縁を巡る鏡の数は36本程度と多い方であるものの、塚原古墳群例ほど密集してはいない。以上の特徴から松長6号墳の轡は、MT15～TK10型式期に位置付けられる金銅装II型式において、後出の段階（TK10型式期新相？）に位置付けられるものと考えたい。

〈松長6号墳へ至る背景〉

このような全国的にも希少な馬具を、松長6号墳の被葬者はいかにして入手したのであろうか。内湾梢円形鏡板付轡が日本列島に導入された背景には、出土例の集中する大伽耶圈との強い関わりが指摘されている。ただし、金銅装II型式は日本列島内でしか出土が確認されておらず、その面繁連結装置としてよく用いられる兵庫鎖の使用例も列島内のみに限られていることから、日本製であることが推測される。また松長6号墳の事例を加えた分布状況を見ると、関西に加え愛知・長野・静岡という隣接した地域での出土が注目される。愛知県や長野県では金銅装I型式も出土しており、長野県は金銅装製品の出土事例が最も多い。このような出土地域の偏りは、鉄製内湾梢円形鏡板付轡に想定されるような、特定地域の集団に対する配布を想起させるものである^⑨。松長6号墳の被葬者へ希少な轡がもたらされた背景には、畿内からの轡の移動を想定するのが妥当であろう。

一貝装辻金具一

〈イモガイ装馬具〉

松長6号墳から出土した金銅装の辻金具は、貝の螺頭部が嵌め込まれた貝装辻金具の可能性が高いと考えられる。貝装馬具は全国的に型式差が少なく（宮代1989）、分布の一極である九州においても独自の形式が認められない（栗林2004）とされる。そこで、それらの出土事例と形態が類似する点を根拠に、今回出土した辻金具を“貝装”と言及した。貝装馬具に使用される貝種の大半はイモガイとされるが、腐食しやすく全形を留めるものは少ないことから、装着されていた痕跡を観察することが重要となる。痕跡の例としては、輪金内側に縱方向に走る線状痕（宮代2010）や座金具の裏側に残る同心円状の凹凸（中村2010）が指摘されている。今回出土した辻金具は鏡の進行が著しく、痕跡の観察は困難であったが、一部に見られた輪金内側の薄い線状痕は、イモガイの痕跡と指摘できる可能性があろう。

〈イモガイ装馬具の型式・分類〉

イモガイ装馬具の分類や編年観については、各研究者による構造や属性などの検討から、ほぼ見解がまとめられている。中村の提示した形態的特徴による分類案によれば、貝装辻金具はイモガイ螺頭部を輪金に嵌め込むタイプに分類され、脚数が4脚以下であることから、嵌込タイプ1類となる。

貝装辻金具は、6世紀中葉（花谷1983）や、TK10～TK209型式期段階（宮代1989）という編年的位置付けが示されている。松長6号墳の年代をさらに絞り込むことは難しいが、脚部に取り付けられた責金具が2条で、その上に刻みが認められる点や、輪金に段を入れ金銅張りで仕上げるなど装飾的要素が認められる点から、やや古相（TK43型式期を下限とする？）を示しているものと考えたい。

〈イモガイ装馬具の分布・製作状況と松長6号墳への配布〉

貝装馬具の分布は、特に九州と関東・東海地域における偏在性が指摘されている（宮代1989）。また出土する種類にも偏りが認められ、嵌込タイプに分類される雲珠と辻金具は、TK10～TK209型式期段階における玄界灘沿岸部（壱岐・沖ノ島を含む）や日田盆地での出土が卓越する。また、関東・東海において貝装馬具の出土数が増加するのはTK43型式期以降であり、その主体となるのは銀刺タイプ

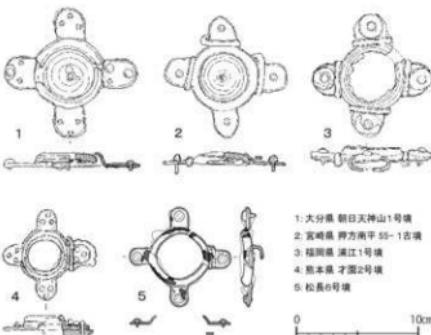
に分類される飾具である（中村 2010）。従って、鉄刺タイプにやや先行し、（北部）九州に分布の集中する辻金具（嵌込タイプ）が出土した松長 6 号墳は、本州においてはかなり特異な事例に含まれよう。

貝装馬具は複数の分布集中域が認められ、各個体差が少なく通有の（定型）馬具と技術差が認められない一群に含まれることから、倭王権下におかれた工房での一括生産および配布が推定されており（栗林 2004）、これは多くの研究者が認めるところである^⑨。また、九州出土貝装馬具の集成において、同一古墳における嵌込タイプと鉄刺タイプの共伴例が確認できないため、馬具種に対する明確な選択の意識があったとする指摘（中村 2010）も注視すべきであろう。いずれにしても、松長 6 号墳被葬者への配布には畿内政権の関与が想定されるが、意識的に嵌込タイプを選択して配布したとするならば、そこにはどのような意図が込められていたのだろうか。

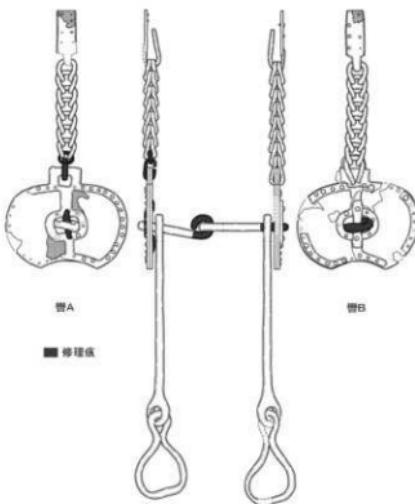
一修理痕一

松長 6 号墳の轡には、いくつかの部位で修理痕が確認された。具体的には、轡 A 鏡板に連結する銜の卯金、その銜を連結するために轡 A 鏡板と銜先環の間に取り付けられた金具、轡 A 鏡板に連結する兵庫鎖の一部、轡 B 鏡板に連結する銜の銜先環である。これらの修理技法を見ると、すべて本来の製作技法とは異なる簡易な技法が用いられていた。銜先環や卯金は、破損箇所をそのままにした状態で藤手状に折り曲げることで機能部を製作していることから、本来の法量と差が生じている。また、兵庫鎖や銜先留金具は、破損部品の代わりに新しく別部品を取り付けることで、機能不全が起こらない程度に修理が行われていた^⑩。

このように、騎乗時に大きな力が掛かる部分で破損が認められる点から、修理は使用時における破損に伴うものと考えられる。また、引手壺に磨り減ったような痕跡が認められる点からも、ある程度の使用期間が見込まれるであろう。これらの簡易な修理により、破損箇所の機能は見た目には回復しているものの、装着した際に轡として本来求められる機能や耐久性を保持していたかは疑問である。修理痕からは、この修理を行った工房の技術水準や、馬具に対する知識・理解度が推測されよう。



第31図 イモガイ装辻金具出土例



第32図 松長6号墳出土轡 修理部位

6. 松長6号墳の位置付け

【古墳の年代】これまで整理した埋葬施設と副葬遺物の見解から、古墳の編年的位置付けを考える。松長6号墳の埋葬施設は、横穴系埋葬施設の要素と、伝統的な竪穴系埋葬施設の要素が混在する複雑な構造を有していた。このような独自性の強い埋葬施設は、横穴系埋葬施設の導入期に東海地方の各地域で散見されるものである。従って埋葬施設から見た松長6号墳の時期は、東駿河地域で横穴式石室の導入期とされるTK43型式期ごろ（6世紀中葉）に求められ、横穴系埋葬施設の要素を持つ古墳としては、この地域で最古級に位置付けられるであろう。

副葬遺物のうち馬具の時期については、TK10（新相）～TK43型式期に求められるものと考えたい。ただし轡の修理（使用）痕などから、副葬までにはある程度の伝世期間が見込まれる。また鉄鏃は、静岡県内におけるMT15～TK209型式期の古墳で見られる鉄鏃の主要組成に類似しており、台形闕と棘闕が併存することからTK43型式期に近い要素がうかがえる。従って、埋葬施設と副葬遺物の両面から想定される松長6号墳の年代は、TK43型式期前後（6世紀中葉）とするのが妥当であろう。

追葬時の状況については、発見された遺物が模倣壊1点にとどまり、初葬時の遺物と副葬時に大きな開きがあることや、床面がほとんど残存していないことなどから、不明瞭な点が多い。

【被葬者像と古墳の特異性】古墳の正確な規模や構造、本来の副葬品組成が明確でないことから、被葬者の性格や古墳の階層性を総合的に判断することはできない。ただ、墳丘長がおそらく20m前後に達し、群集墳内で最大級の規模を誇る点や、金銅装の馬具を有する点で、少なくとも松長古墳群一帯に居住する集団において中心的な立場にあった人物の一人であることは間違いないであろう。

被葬者の性格を示すものとしては、量、種類ともに豊富な金属製品が挙げられる。鉄鏃は副葬数が約20本と推定され、同形態少量副葬の平根式鏃+複数形態多量副葬の尖根式鏃という副葬スタイルをとる。馬具は、金銅装の轡と辻金具に畿内との関連性が見出された。国内でも希少な形態の轡と、九州地方で出土が卓越する貝装辻金具が共伴する馬具構成に、被葬者の特異性が表れていよう。陸側に加え、海側の移入ルートも利用可能な立地条件を活かし、新來の情報や希少な製品を入手できるような情報・人脈を確保していたのではないだろうか。

【注釈】

- （1）鉢は出土した古墳として、兵庫県鬼山神古墳。大阪府一須賀山15号墳、愛知県安田堀古墳、長野県銀形原古墳、長野県厚原古墳群、長野県久保田1号墳を挙げ、井上コレクション旧蔵品にも類似があるとしている。これら以外の資料収集を進めることができておらず、出土事例を把握しきてない可能性が高いために、増加したとしても10例程度に留まるものであろう。
- （2）鉄製内溝柄円錐形鏃付轡は、宮崎県南部や奈良県下、静岡県西部、長野県南部、埼玉県などから集中的に出土しており、各地域の特性から馬具生産などに長い歴史の新興関係によるものと想定されている（鈴木 2006）。出土古墳の多くは中小規模であることから、これらの集団は各地域の有力者層よりも下位に位置するところがうかがえる。
- （3）製作地については、近畿地方で一括生産を行うケースと原材料の入手が容易な九州に工人を派遣し、当地で一括生産を行うケースが示されている（栗林 2004）。
- （4）これら復元方法のパターンは、栗林誠治の示した模型のうち、再利用U型と、代用型に該当するものと考えられる（栗林 2004）。

【引用・参考文献および図の出典】

- 内山敏行 2013 「金銅製品の型式と研究」 馬具「古墳時代の考古学4 副葬品の型式と編年」 同成社
 大友保奈美 1995 「イモモリと御車」 『古代探査』 N 幸田山大学出版部
 大谷弘治 2001 「馬具構造論－馬具構造からみた東海の後期古墳－」 第8回東海考古学フォーラム三河大会「東海の後期古墳を考える」三河古墳研究会
 大谷弘治 2003 「遠江・三河・伊豆における古墳時代後期の轡選の変遷とその意義」 『静岡御蔵鐵文化財調査研究会研究紀要』 第10号
 栗林誠治 2004 「馬具の生産と地域屈指数－輪軸辻金具からの中核計－」 「鉄器文化の多角的研究」 鉄器文化研究集会第10回記念大会： 鉄器文化研究会
 鈴木一有 2001 「東海地方における後期古墳の特質」 第8回東海考古学フォーラム三河大会「東海の後期古墳を考える」三河古墳研究会
 鈴木一有 2002 「鏡ヶ森1号墳の内構造」 『三河考古』 第15号
 鈴木一有 2006 「東海の馬具と轡大刀にみる地域性と首長性」 「東海の馬具と轡大刀」 東海古墳文化研究会
 中村正則 2010 「古墳時代後期のイモモリと御車に関する基礎的研究」 『東進』 2003-3号 地下式横穴墓出土物をもとに－先史学・考古学論叢V－甲元義之先生追記記念－下巻
 横木文佳 2013 「金銅製品の型式と研究」 馬具品「古墳時代の考古学4 副葬品の型式と編年」 同成社
 芦谷 茂 1983 「馬具」 『周易編二号墳』 久慈川町教育委員会
 宮代栄一 1989 「むかひる馬具鑑賞について」 『鷹台史学』 第76号
 宮代栄一 1996 「以製雲雷紋の韁轡・古墳時代馬具の地方生産に關して－平成7年度九州考古学会研究発表要旨」 『九州考古学』 第17号
 宮代栄一 2010 「別所ハト＝有機物跡なし？座を理めたんだと考えられる雲雷紋・辻金具について－古墳時代馬具研究における微細な有機物跡の観察法をめぐる－考観」 『九州考古学』 第86号
 山本義三 1995 「御車塚下の6-7世紀の土器類－一部河内・伊豆北部の現状について－」 『前原考古研究』 第4号
 爰知県史編纂委員会 2005 「愛知県史」 資料編3 古考古学 古墳 長野縣 1988 「長野縣史」 資料編 全1巻（4）道構・物語

写 真 図 版



調査着手前状況（北西側から）



調査区および埋葬施設全景

PL.2



床面 2 と閉塞部検出状況（西側から）



床面 1－B 検出状況（西側から）



床面 1-A 検出状況（東側から）

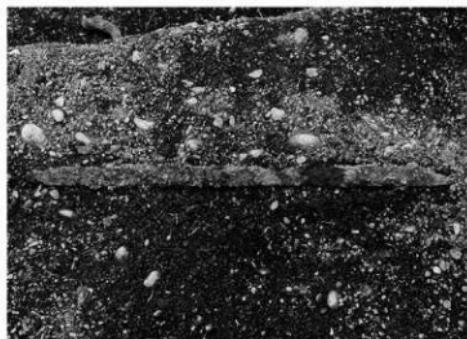


墓坑（掘り方）検出状況



床面および地山半裁状況

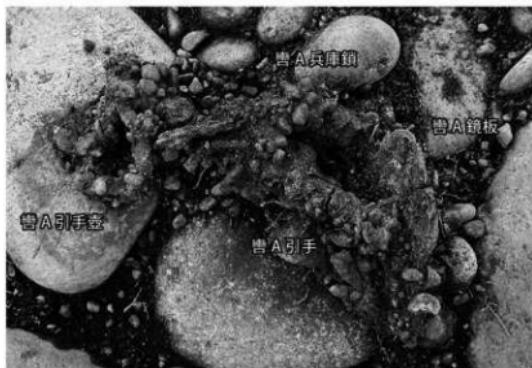
PL.4



大刀出土状况



小刀出土状况



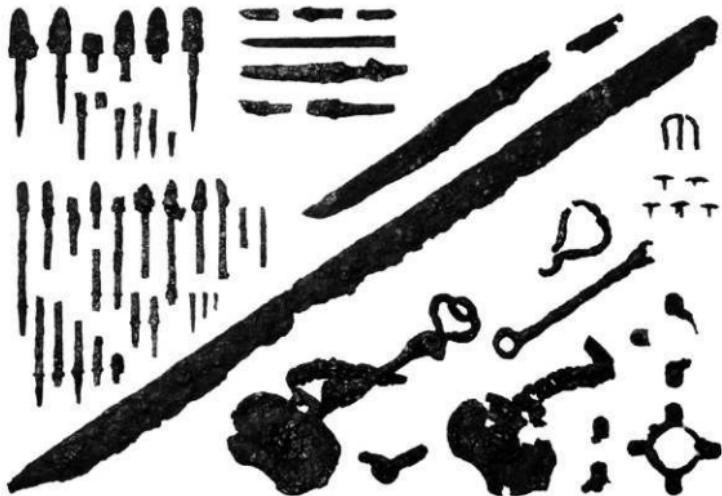
馬具（告 A）出土狀況



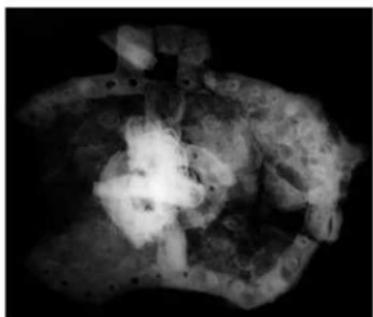
馬具（辻金具）出土狀況



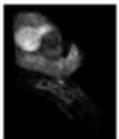
模做坯出土状况



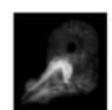
初葬時の副葬遺物



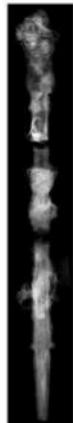
唐A銛板



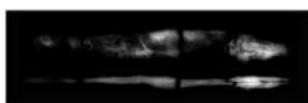
辻金具



唐A



鐵鎌



大刀と小刀



X線画像



全銅装内湾積円形鏡板（第21図2）



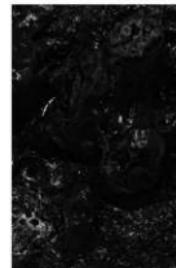
全銅装内湾積円形鏡板（第21図2）



叩金（第21図3）



緑金に打ち込まれた鉢



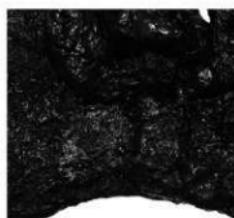
銜先を固定する金具（鏡板裏側）



修理鉢（兵庫鎖代用金具）



吊金具



金銅板

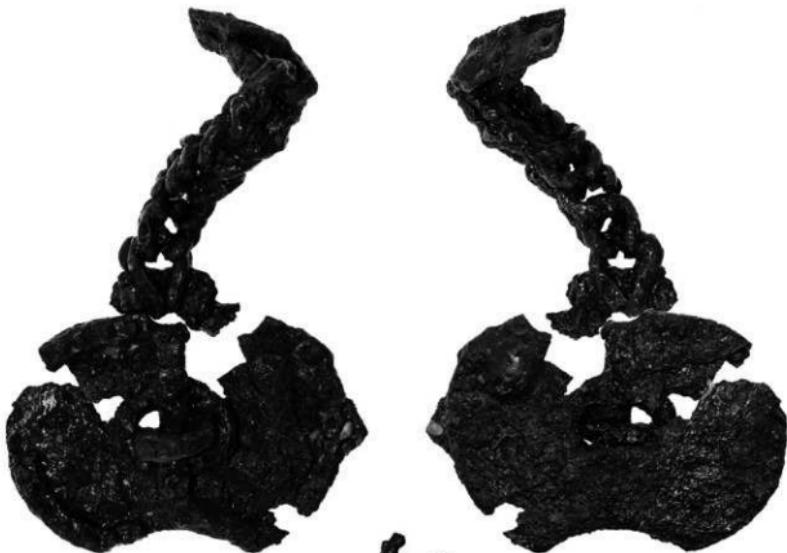


引手・引手壺・兵庫鎖（第21図1）



修理鉢（兵庫鎖代用金具）

轡 A（全銅装内湾積円形鏡板・引手・引手壺・兵庫鎖）および銜（叩金）



金銅装内湾椿円形鏡板（第22図7）



兵庫鎖側面（第22図6）



吊金具



引手壺（第22図4）

街先を固定する金具



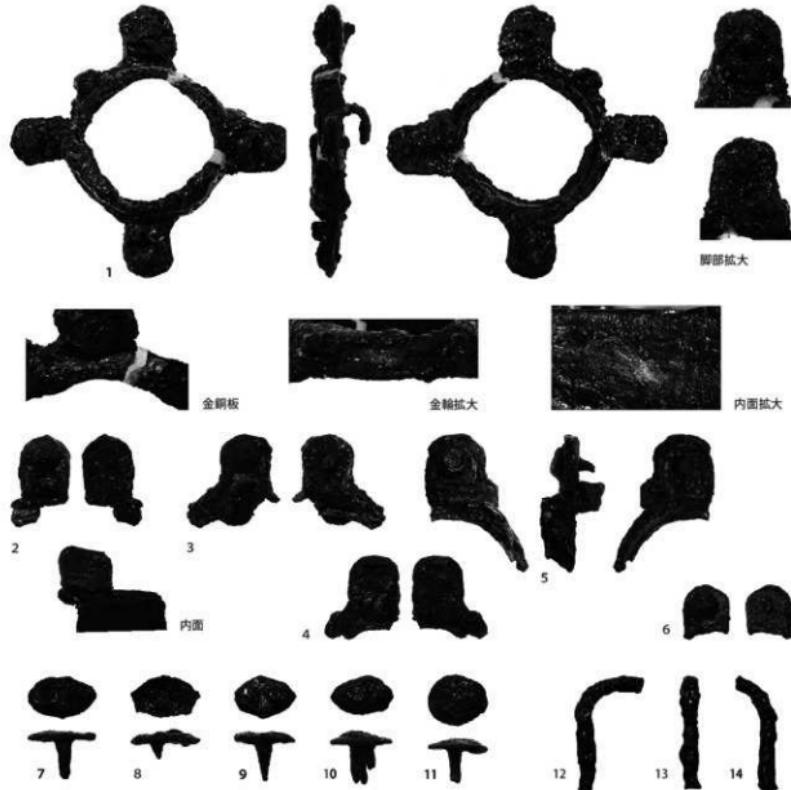
かしめ留め（鏡板裏側）

引手（第22図5）



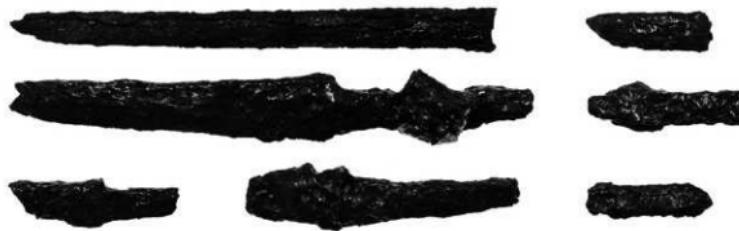
修理痕（街先）と金銅板

図B（金銅装内湾椿円形鏡板・引手・引手壺・兵庫鎖）

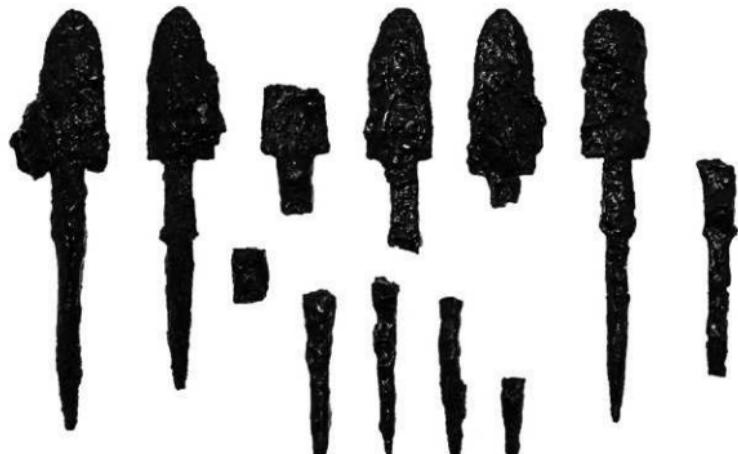


1~6: 钜金具 (第23図8~13)、7~11: 飾金具 (第23図14~18)、12~14: 鉸具 (第23図19~21)

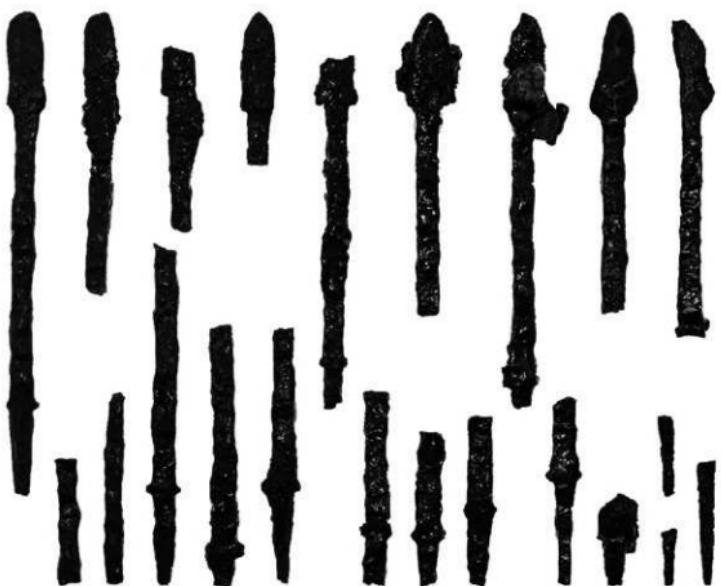
鉜金具・飾金具・鉸具



刀子



平根式鐵 (第 25 図 1~12)



尖根式鐵 (第 25 図 13~34)

鐵鎌

PL.10



埋葬施設内出土土器



埋葬施設外出土須恵器



大刀・小刀

弥生時代石器

銅錢

報告書抄録

沼津市文化財調査報告書 第110集
松長6号墳発掘調査報告書

平成27年3月30日 印刷
平成27年3月31日 発行

編集／沼津市教育委員会

発行／沼津市教育委員会
沼津市御幸町16番1号
TEL 055-931-2500（代）

印刷／みどり美術印刷株式会社